雑誌を読む　1月

自由帳

行きづまったときほど立ち止まり、ふり返れ、日本の文化や伝統に根ざせ、というスローガンばかりが目立つなかで「中央公論」の「『日本民族』といわれるものの正体」（網野善彦、五木寛之、山内昌之各氏の鼎談）は「日本列島に住み、日本語を話し、日本文化を共有するのが日本民族」という自明のことから疑って示唆的である。

その中で「僕は北朝鮮から一九四七年に引き揚げてきた植民者の一族」であり「難民の問題は即自分の問題」という五木寛之は、難民問題をネガティブにとらえるのでなく、「流動という視点から見ると、ひとつの社会、文化が活性化していく上での、とても大きなダイナミックなバネになる」という。

これに興味をもって「同時代批評」16号「踏み越えられる国境――難民の世紀末」を読んだ。ここでも五木はインディオ、エスキモー、アイヌ、バスク、すべての民族問題の千年の歴史が清算されざるを得ない地点に我々はいる、といい切り、対談相手の中嶋英助は「置き去りにされた残留孤児、日系移民、アジア諸国難民、出稼ぎ外国人労働者などをふくめて、日本をめざす大流動の時代が来ている。彼らは第二級市民には断じてとどまらず、いつかは日本を内側から変えていくかも知れない」と答えている。

精神の鎖国を超えて

在日の知人から「ハンバーガー屋で周りを見回したら、客はみんな外国人だった」「飛行機に乗ったら華僑のおばあさんがまるでバス停を聞くように、次ほどこで止まるの、とたずねた」などと聞くと、びっくりする。「自由なアジア放浪」などできない、子供と地域に縛られた「鎖国日本」の住人としては、この特集も驚くことばかりだ。「祖国も選挙権も知っちゃいないという」「成田を通ってこない進中」がどんどん増えれば、地域そのものも変わらざるを得ない。

戦時中の朝鮮人強制労働を扱った石飛仁の「花岡事件の深層」、「侵略のスポンサー」日本を批判する古沢希代子「東ティモールの悲劇と日本のODA」はじめ、多彩な論考に考えさせられた。（森まゆみ）

「普通の国」は何をめざす

森まゆみさん　北岡伸一さんが「普通の国と普通でない国」（THIS IS 読売）で、河野洋平さんや武村正義さんを批判しています。小沢一郎さんに近いと言われる人なので、前半は当然の論調ですが、最後のアメリカ人に対する日本人の違和感、日本人が大切にしている価値との衝突という指摘が面白い。文学や思想を含む広い意味の歴史を読み直し、日本人の価値観に立ち戻っていくとともに、戦前・戦中の「公」に代わる新たな「公」を発見しなければならないという。

田中明彦さん　北岡さんは普通の国という言葉の内実を埋めていこうという議論をしています。今アメリカも普通の国に向かおうとしているし、日本も普通の国になった方がいいという前提で。

普通の国の中身に関しては、五百旗頭真さんが「新世界無秩序論をこえて」（アステイオン冬季号）で、日本の選択として①非軍事経済主義②自前の軍事大国③ノーマル・ステイト（普通の国）④グローバル・シビリアン・パワー――の四つの考え方を紹介している。シビリアン・パワーはドイツのハンス・マウルが言い出した言葉で、国際社会の中でミリタリー・パワーはできるだけ減らしていく、その一方で、望ましくないことが起きた時には敢然とシビリアンのパワーを行使するという考え方です。五百旗頭さんの論が③なのか④なのかあいまいですが、中身を詰めていこうという議論の方向性は望ましいと思います。

橋爪大三郎さん　五百旗頭さんはドイツやロシアでも普通の国という言葉が、二通りの意味で語られていると指摘している。ただ、日本の文脈では、憲法改正をはっきり言うと国民のアレルギー反応があるので、その代わりに普通の国と言っているわけ。普通の国の論の中身は、国家目標を決め、政策手段を決め、最後に憲法改正となるわけなのに、その議論をスキップしてイメージを先行させている。

森　普通の国という言葉はいつからあるんですか。

田中　最近では小沢さんの本「日本改造計画」が有名になったきっかけですが、五百旗頭さんも二年前の著書でノーマル・ステイトを論じている。確かに普通の国という言葉を使いすぎると、イメージが先行して、中身の話が飛ばされる恐れがある。

森　佐伯啓思さんが「自由主義か、民族主義か」（諸君！）で、生活者重視という言葉も意味があいまいで、ポーズにすぎないと指摘している。中身を詰める前に看板やレッテルが出てしまうのは、議論を阻害するのではないでしょうか。

橋爪　普通の国という言葉が飛びがいいのはそれなりの意味がある。冷戦下は異常な国際社会で、アメリカが冷戦が終わり、アメリカの圧倒的影響力が低下している時代に、人間が国家との関係の中で生きていることをもう一度見直す時期にきている。国家に全忠誠を尽くす、という国家主義ではないけれども。

橋爪大三郎さん

森　どっちに持っていったらいいのかという論議は私にはよく見えてこない。

橋爪　神谷万丈さんが「国家和意識と『平和』政策」（世界）の考えに賛成です。日本が侵略性を反省し世界の秩序に責任を持つ普通の国以上の超大国になった。半面、ドイツ、ヨーロッパ諸国、日本が普通の国以下の管理される国になった。社会主義圏でも同じです。冷戦が終わると、超大国と普通の国以下の組み合わせではやっていけないので、当然再調整が起こる。近代国民国家という点では対等なので責任も分かちあうべきだ、という論法が出てくるのは健全な議論だと思います。

田中　佐伯さんは、リベラリズムの中に国家という概念が希薄なことを指摘して、これからは国家も見すえたリベラリズムを考えなければならないと主張している。冷戦時代、日本は国家というものをあまり考えなくてもすんだ。国家が本来果たすべきことの半ばくらいをアメリカにしてもらった。

田中　明彦さん

目標なき国家戦略論」（諸君！）でとっている批判のスタンスは共感できる。浅井基文さんが、国連中心主義を唱えながら国連への軍事協力を拒否するのはおかしい、という批判。常任理事国問題についても、常任理事国入りは手段であり、どういう国際秩序をめざすのかという国家目標を先に議論しなければならないと指摘しています。

森　国連の軍事的措置に参加しないということでは、日高六郎さんの「平和憲法の先駆的で理想的な性格を大事にしたいと。NGOで平和的な活動を進めるとともに、常任理事国入りについても市民が一人ひとりの議員に意見を聞くべきだといっています。

田中　日高さんの議論は原理的に少しおかしい。そのような意味での平和主義を貫けば国際連合もなりたたなくなる。アメリカ、フランスなどではパシフィズム、平和主義は宗教上の信念としては尊重され尊敬されるが、政策として特に進歩的だとは思われていません。

橋爪　パシフィズムが非現実的だということは、日本人もだんだん気が付いてきた。湾岸戦争とカンボジアPKOの影響が大きかった。

田中　日高さんがいうNGOや経済協力を一生懸命やり、警察活動、災害救援などに重点をおくということには異論はありませんが。

森　まゆみさん

橋爪　そうですね。

田中　中央公論の「『日本民族』といわれるものの正体」で話されていることも重要な論点です。単純化すると、私たちがいう日本国家も日本民族も大昔から連綿と続いてきた存在ではないという話です。

橋爪　日本はホモジニアス（均質的）な社会で日本人だけに通用する感覚があるというのは確かにそうだけれども、それを自覚する目的が問題です。日本人には独自の価値がある、という突っ張り方で、五、六十年前に大きな問題を起こした。そうではなくて、共通点にたどりつくためにこそ日本の独自性を探っていく必要があります。

田中　政治改革問題の決着後は、各党は日本の針路について、それぞれ論拠をあげて示してもらいたい。

森　国民としては、政治家は憲法改正するという考えがあるなら、「普通の国」などという言葉でごまかさずにきちんと説明してほしい。そうしないとフェアではないし、わけが分からないうちにまた、なだれを打つようなことになっては困ります。

もり・まゆみ　地域誌編集者▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

◆ 読む・ガイド ◆

（広告批評以外の月刊誌はすべて2月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
普通の国と普通でない国	北岡伸一 THIS IS 読売	普通の国に盛り込むべき理念の発見を急ぐ必要がある
理念を「持たされた」男	石川好 月刊Asahi	小沢一郎氏には大衆の内圧から生まれた理念がない
平和意識と「平和」政策	日高六郎 世界	日本は「侵略」と「憲法の先駆性」の自覚に失敗した
自由主義か、民族主義か	佐伯啓思 諸君！	大衆迎合的現実主義を克服しリベラリズムの復権を
日・中・米　21世紀への四つのシナリオ	R・マニング 月刊Asahi	日本の独自行動、新協力体制、日中同盟、それとも……
「日本民族」といわれるものの正体	網野善彦、五木寛之他 中央公論	日本人は本当に均質か、日本人の民族意識の由来は
94年に日本の政治の方向が決まる	佐々木毅 エコノミスト1/4	政治の枠組みを再構築できるか、政治が崩壊するのか
日本「民主党」結党宣言	小沢鋭仁、茂木敏充 Voice	新保守主義と対峙する新自由主義の党、民主党を
戦争責任の日米ギャップ	油井大三郎 世界	戦争責任問題に自ら決着をつけるチャンスが来ている
消費税「引き上げ論」への疑問	海江田万里 宝石	現行の消費税の欠陥を是正し、福祉目的税にすべきだ
政治による経済管理を避けよ	猪木武徳 中央公論	短期的な景気刺激を目的とする従来型政策は失敗する
田中角栄と私の二十年	立花隆 文藝春秋	「あんな奴らに負けてたまるか」と書き続けた1万枚
無敵の大人物田中角栄	野坂昭如 週刊文春1/6	率直に、田中さんは政治の天才、大人物だったと思う
ビートたけし　ザ・トリックスター	吉田司 宝島30	国民的道化、テレビの王様、戦闘性はどこへ行った
わが息子を語る	細川護貞 宝石	決断の早さは細川家の伝統。戦闘的で争い事が好き
白熱討論　日本史をつくった101人	丸谷才一、山崎正和他 現代	頼朝、西鶴は落ちた。高島象山、三宅一生は選ばれた
思想としての八〇年代	竹田青嗣 情況	批判が自己目的化した「批判主義」の思想は死滅する
特集　20世紀の「失敗」人物篇	上野千鶴子他 思想の科学	フロイト、レーニン、毛沢東、力道山の失敗とは何か
逸見政孝「がん報道」の幻影	保阪正康 諸君！	逸見報道は、がんに対する闘いを矮小化し戯画化した
特集　マスコミ元年	筑紫哲也他 広告批評1月号	マスコミ改革を政治改革に遅らせないために

雑誌を読む　2月

「官僚国家」を超えて

田中明彦さん　今月、官僚論が多く出たのはいいことだと思います。政治改革で国会議員の問題が一段落したので、次に日本のシステムの中で官僚組織をどう考えるかということです。今度の日米首脳会談でも米国の交渉者は「正義の味方の細川首相をマンダリン（頑迷な官僚）が取り囲んでいる」と非難した。細川政権ができて以来の官僚論の多くがタテマエ論的に日本の官僚制度を批判していたのですが、今月は座談会など軽いタッチで率直に語ったものが多い。

森まゆみさん　私たちなんかは官僚と言われてもピンとこないし、生態がよくわからないんです。だから宮本政於さんの本（『お役所の掟』など）が売れているんだと思います。中央公論の特集「古巣へ一言」も各省庁の特徴や、スピンアウトした人と最後まで務めた人の違いが出ていて面白かった。森山眞弓さんが、政治がフワフワしているときこそ官僚がしっかりしなければ、と言っていましたが、国民にもそんな気持ちがありますね。

田中　論点が二つある。一つは、日本の官僚制は優秀であり、官僚はだめだとか、天下りはだめだとか言っているとせっかくの有能な集団がやる気がなくなってだめになる。「『官』が亡べば国も亡ぶ」（中央公論）での西部邁さん、「官僚叩きこそ亡国への道だ」（諸君！）での両角良彦さん、諸井薫さんはそうです。他方、自民党長期政権の中で各省が独立王国と化し、大きな方針を決めたり、国としての意思決定がうまくできない、という問題。西部さんとの対談で佐々淳行さんが言っています。これらの問題を調和させる名案はあるか、だと思います。

猪口孝さんの「新・族議員待望論」（中央公論）は「官僚突出政権」を描いてリアリスティックな分析だと思いますが、最後に「政策通で、情報通で……」という「新しい族議員よ出よ」というのは、どうしたらそういう人たちを出すことができるかよく分からない。鈴木幸夫さんの「細川式『大蔵・通産依存体制の功罪』」（中央公論）も優れた分析ですが「日本の土壌にふさわしい官僚の位置付けを」ということについては、どうしたらいいのか疑問を持ちます。

森　官僚に批判的なのが小室直樹さん、加藤栄一さんの「官僚不況論」（サンサーラ）、宮本政於さんの「官僚制度には『責任』が欠如している」（エコノミスト2／15）です。批判論者の共通点は、アメリカ経験が長いことで、日本の官僚組織のムラ社会的なことや責任欠如、非能率的は耐えられないのだと思います。これからの若い人も耐えられなくて人材が集まらなくなるのではないでしょうか。

橋爪大三郎さん　宮本さんが、先輩役人に「官庁は企業を大きくするためにある」と言われた、と言っています。「さよなら総力戦体制」（Voice）では野口悠紀雄さんが、国家総動員体制の一九四〇年体制が戦後も続いている、と言っています。日本は政治と官僚が癒着し、政治的判断が極めて少ない官僚的統制の色彩が極めて強い体制でやってきましたが、それをこのまま持続していいのかについて、今、大きな分岐点に来ている。それが行政ではなく、政治的判断に属するはずの領域だった。一九四〇年体制とか、明治政府の太政官の時からとか言いますが、官が実質的な政治的決断や、法令の解釈について裁判所の役割までやっていたというわけである三権を全部握っていたというわけです。単に政治による行政への不当な介入という問題ではない。

森　大臣ポストは政策能力や見識でなるというよりは、単なるポストの奪い合いとしてあるわけですね。

田中　大臣は一年以内で変わってしまうので、役所にとってはお客さん。官僚の意識としては、お客さんのくせに、よその家の子どものしつけにまで口を出さないでください、ということです。この改革案を考えると、おおむねアメリカ型になってくるというジレンマもあります。高級官僚の政治任用を増やせとか、小沢さんが言うような政務審議官を作って国会議員を各省に張り付けるとかです。官僚擁護派は、そんなことを言ったら夜遅くまで安月給で一生懸命やっている人はやる気をなくすじゃないか、と反論します。批判派はここをどう乗り越えるかですね。

森　地方自治体についての議論が少ない気がします。中央官庁から地方に出向している人と会うと、感じが悪いと思う人が多い。エリート意識が強くて同僚をばかにしているし、住民を信じていない。佐々さんが、自治体の職員は中央に比べて能力がないので地方分権と言っても困る、と言ってましたが、そういう見方も困ります。

橋爪　官僚は有能でないと困る。そういう意味でエリートであることに全く問題はないんです。問題は有能さの質です。国民がこういう方向で政策を実現してくれと命令して、それを与えられた時間内で計画を作って実施していく。それ以上でも、それ以外でもない。そういうことがよくできる人をきちんと抜擢し、それにふさわしい待遇を与える必要がある。

田中　日本の産業政策は「通産省と日本の奇跡」なのであって、政治家が産業を引っ張ったわけではない。七〇年代ビジョンとか八〇年代ビジョンは官僚が書いている。一面ではうまくいっているのですが、選挙ではなくて、試験で選ばれた人がやっている。本来、そういうビジョンを書きたい人は政治家になってほしいですね。

橋爪　「さよなら総力戦体制」では、規制を廃止してさまざまな官僚のさしでがましい介入をやめないと構造転換は進まないという。一方、西部さんが書いているけれど、市場原理は不確実性の問題に対処できないから、国家的なコントロールが必要だという。この議論は私はちょっとついて行けないのですが、官僚的なコントロールの必要性について両極の意見があります。

田中　官僚の待遇と将来について十分配慮したうえで、局長クラスくらいまで行けばいったん全員辞めて、政府が任命し直すというシステムがあっていい。

橋爪　いくつかプランが出ていました。佐々さんは官僚OBのための国立のシンクタンクを作る提案をしています。建設的な知恵を出さないで、官僚を目のかたきにするだけでは議論は一歩も進まないと思います。

田中明彦さん　橋爪大三郎さん　森まゆみさん

自由帳

「穏健な民主」中国の遠い道

離れから三月にかけて二度中国を訪れ、いろいろなことを考えさせられた。

帰国して手に取った『世界』3月号が、魏京生氏のインタヴューを載せている。魏氏は七八年「民主の壁」に数々の文章を発表、七九年に逮捕され、去年九月に釈放されるまで十五年を獄中で過ごした民主化運動の象徴的存在だ。金大中、ハベル、マンデラ……。獄中からも政治的リーダーへの路は開けている。中国の場合、それは考えにくいが、氏がどのようにいまの中国を見ているか知りたくて、頁を繰った。

厳しかった獄中生活。最近の党幹部の腐敗。爆発寸前の農民の苦境。語り口から、氏の的確な現実感覚を私は感じとった。また「中国の人々は近代史のなかでつねに、日本政府が中国の最も反動的な政府を支持してきたと考えている。こうした態度は日本に、中国が立ち遅れればそれだけ自国が安全になるという伝統的な戦略があるからではないか」という指摘は、われわれの無意識を言い当てていると思った。これは聞違っている。中国に民主的な政権が成立すれば、日本にもメリットは大きい、中国の人権状況と民主化運動に対する関心を持ち続けてほしい、と氏は訴える。

だが、アメリカがことあるごとに人権問題を持ち出すことに、反発する中国の人びとが多いのも確かなのだ。「中国の実情を無視した大国の干渉」というのが平均的な反応である。人びとは、農村の貧困や潜在失業、人口圧力、貧富格差などの危機を肌で感じている。共産党は、それらに対処できるさしあたり唯一の選択肢なのだ。

毎日「副食品市場」（スーパー）で買い物をした。物価は日本の数十分の一だが、給料が百分の一なので、生活は大変だろう。国営企業のレイオフも、農民の不満も拡大している。これが、魏氏の待望する「賢明で穏健な民主勢力」の台頭をうながすか、それとも動乱の暴発に向かうのか、予断を許さない。

（橋爪大三郎）

おことわり

「大月隆寛の無茶修行」は休みました。

◆ 読む・ガイド ◆

（「広告批評」以外の月刊誌はすべて3月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
「官」が亡べば国も亡ぶ	佐々淳行、西部邁 中央公論	うわべだけの官僚批判をやめ現状と理想を語るべきだ
官僚叩きこそ亡国への道だ	両角良彦、諸井薫 諸君！	官僚がヤル気をなくしたらだれがこの国を支えるのか
官僚不況論	小室直樹、加藤栄一 サンサーラ	日本の官僚は三権全部をさん奪している
「複合スキャンダル」通産省が震えた日	特別取材班 現代	事件は官僚世界全体への不気味な恫喝として作用する
内藤局長はなぜ辞めたか	加賀孝英 文藝春秋	政界を巻き込んだ児玉派、朋橋派の暗闘
新・族議員待望論	猪口孝 中央公論	日本の民主政治が官僚専制になってはいけない
官僚制度には「責任」が欠如している	宮本政於 エコノミスト2／15	待遇はもっと良くし、減点主義から加点主義へ
サイタマ県議会の「びっくり見聞録」	長沼明 月刊Asahi	県庁には議員を監視する優秀なKCIAがある
小沢一郎がもつ得体の知れなさ	山口二郎 THIS IS 読売	普通の国に対抗する国家像を打ち出す政治勢力構築を
政治家の冒険——新党を考える人々に与ふ	石川好 月刊Asahi	青年よ自治体の長をめざせ、そして新党を作ろう
細川護熙の広告的研究	島森路子他、広告批評2月号	細川首相のパフォーマンスは広告そのものだ
エイリアン宰相　細川護熙の研究	真神博 文藝春秋	熊本県知事時代、佐川グループとの関係が深まった
ロシア認識の根本的再検討を	袴田茂樹 中央公論	権力の空白はロシア社会に無秩序と荒廃をもたらす
法人資本主義のたそがれ	奥村宏 世界	55年体制の崩壊で日本の「法人資本主義」も解体する
ゼロ戦型国家・日本のタナ卸し	大前研一 文藝春秋	21世紀の知的戦争は米国の1人勝ちになってしまう
「競争」と「共生」の神話	日下公人 諸君！	安易に日本型雇用を否定して中高年をクビにする愚行
「文明の衝突」論の背景	山崎正和 Voice	無邪気な「近代への反逆」論が政治的混乱に力を貸す
戦術としての「月はどっちに出ている」	越智道雄 宝島30	被差別者自身が差別を笑う所から差別意識を解体せよ
「お笑い」と共存できない反差別社会は不毛である	松原隆一郎 宝島30	「お笑い」と「反差別」の間の対話不能を克服する道
大検証　プルセラ世代の道徳観	呉智英他 SPA！ 2／16	「だめだからだめ」という以外に通じる理屈があるか

▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

雑誌を読む　3月

日本の雑誌ジャーナリズムで「科学」はどのように論じられているのだろうか。今月は、生命科学や環境問題に造詣の深い米本昌平氏を招き、最近のホットなテーマである「原子力」と「遺伝子」について橋爪大三郎、森まゆみ両氏と話し合ってもらった。

「科学」の論じられ方

橋爪大三郎さん　ドイツの原発問題で、バート（1／10―2／28）に広瀬隆さんのリポートがありますが非常に感情的です。「滅亡の中にそびえ立つ城砦」「永遠に動かぬ廃墟」などと原子炉を描写している。科学というより小説だ。

米本昌平さん　でも、このレベルのジャーナリズムはこんなもんだと割り切ってもいい。問題は注意喚起したその次です。米欧にもイエロージャーナリズムはありますが、それを修正して余りあるほど専門的なコメンテーターがいる。日本の「論」の一番悪いところが科学に出ている気がします。大変だ、大変だ、とか、倫理的に問題だと言うのが知識人の役割だ、ということで終わってしまう。

森まゆみさん　政治経済に限っても、脅かすジャーナリズム、不況だぞとかリストラだぞとか脅かすのが多くて、それが科学記事にも出ている。

米本　参考にアメリカ議会の技術評価局（OTA）がやっている調査報告書を持ってきました。科学技術政策について、軍産複合体がどうやって普通の企業群に変換していくか、巨大な核兵器研究所がどうやって食いつないでいくか、二十一世紀初頭に寿命がくるアメリカの原発をどうするか、という一連のリポートを出している。

森　報告書は市販してるんですか。

米本　そう、すべて十ドル前後です。これがアメリカの民主主義だというんです。社会的な意思決定をするときに、必要な骨格情報を全部出す。議論の参入者が理解しやすいよう、国がきちんと編集して出す。隠したいことは隠してるんですが、一般的にはごまかさない。日本でも政府にこういう情報を出せるようにしなければならない。

森　米国のプルトニウム人体実験の話が二つの雑誌に載っています。

米本　人体実験については冷戦が終わってやっと言えるようになったところがありますね。冷戦時代のアメリカは国家安全保障のためというと何でもできた。当時はだれも疑問をさしはさめなかった。今から見たらひどいことをやったんですが、一九五〇年代まではだれも抵抗できなかった。後から生まれてきた人間が安直に過去を裁断しちゃいけないと思います。広瀬隆さんのサピオ（3／10）のものと、バート（3／14）の福田みずほさんのリポートがありますが、福田さんの方が優れています。現地に行って書いているし、スタンスがいい。

橋爪　私もそう思いました。しかし、とにかく、アイリーン・ウエルサムさんという人がえらい。地方紙の記者でこの問題を六年間粘って暴いた。

右から橋爪、米本、森さん

森　エネルギー省の長官が少数民族の人に代わり、政策転換して全部明らかにしたというのもすごいですね。

米本　日本でもやったらいいんですが、資料は残ってないと思います。

橋爪　日本の場合は記録もなければ情報公開の任組みもないので、意思決定を検証することができない。

ところで、高速増殖炉、プルトニウムの問題は国民がどう判断したらいいのかわかりにくい。槌田敦さんの「原発はもう脳死状態」（宝島30、93年12月号）を読むと、原発は時代遅れだ、核燃料サイクルなんてとんでもないと言う。一方で天然ガスがたくさんあるからエネルギー問題は解決だ、とある。その限りではわかる。でも炭酸ガス排出問題はどうするんでしょうか。

米本　炭酸ガスについては、原発自体は発生はほとんどないんですが、原発を作るため保管のためのエネルギーがいるという批判はある。炭酸ガス削減は結局、省エネが一番いい。

森　原発はドイツが完全に撤退するし、ヨーロッパ各国も撤退しはじめていますよね。

米本　フランス以外はそうです。環境保護運動の力が大きいから。アメリカは電力会社が小さいから管理コストが高くつくと経済的に苦しい。

橋爪　高速増殖炉を推進している側はどう考えているんですか。将来、エネルギー需給が厳しくなるし、炭酸ガス問題もある。各国があきらめている今こそ先行技術を取得しておけば有利になるという論理も成り立つかも。

米本　科技庁の人はそういう言い方をします。ただ、全体では原子力はもう天井だと思います。一つにはアメリカの戦略がある。核不拡散の立場からはあちこちでプルトニウムをためてもらっては困るからです。岸本康さんの「検証・『日本核武装必至論』」（中央公論3月号）が、日本がなぜ核武装するように見えるのかを書いている。北朝鮮が一発でも核を持てば、日本は当然核を持つようになるだろうと思われている。そういうアメリカ側の発想を聞くと日本側はぎょっとしますが。

橋爪　日本が核燃料サイクルを推進してプルトニウムをため込もうという考えと、アメリカの核拡散阻止の国家意志とは調整がついてるんですか。

米本　日本はIAEAの査察の優等生で、IAEAとアメリカに手のうちを全部明らかにしている。だから許してくれるだろうと希望的観測できたんじゃないですか。

次に遺伝子の問題ですが、「日本の科学者」（水曜社）3月号が特集をしています。松山誠さん、中川米造さんは遺伝子操作や出生前診断をやったらナチス時代の優生学になるという。でもそろそろ表面的な類似性を並べて危険だという時代ではなくなっている。ナチスをすぐ持ち出すのは社会運営に対する一種の自信のなさです。ドイツではナチス時代の医療、技術政策について実証研究が進み、一方では現実の差別をどう社会が抑制していくかを研究している。ヒトゲノムマッピングについては、米国で法的社会的問題などに三％の資金を投入する原則で研究した結果、どんな問題が起こるかはほとんど見えてきた。この辺の知的成果が日本ではそしゃくされていない。

森　日本の科学はアメリカとか先進国の成果を読んで成り立ってきたと思うんですが、そうではないんですか。

米本　ソフト面での基本的な文献を読んでいる人は驚くほど少ない。

森　優秀なサイエンスライターは日本にはあまりいないんですか。

米本　少ないですね。大方が俗流ジャーナリズムでも仕方ないのですが、これだけは重要だという問題について、どう世の中に知らせるかです。

橋爪　科学技術政策はこれから政党で議論してほしい。今度は政党に公的助成がつきますから。各政党がどんどん研究を委託すれば、シンクタンクの質も向上するかもしれない。

▽よねもと・しょうへい　三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室長▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

自由帳

「行くわけがない」ところ

弱音を吐けば、毎月、総合雑誌の「日米交渉」「政治改革」「連立政権」などに関する論文を読むのは相当に苦痛だ。書き手はいつもおなじみで、「維新」だの「戦国時代」だの見出しもオジサン臭いし。

アレックス・カー「日本文化の『慰霊碑』」「新潮45」（4月号）みたいな楽しい文章に出会うと、「地獄で仏」だ。笑った。

東洋文化研究家である氏は、東京国立博物館には、すばらしいコレクションがあるのに「僕の知ってる日本人の若いアーティストや知識人はよほどでない限り上野に行くことはありません。外国人も一度は連れていかれますが、その後は足を向けません」という。

ナゼか。実地検証してみる。西洋美術館のバーンズ・コレクション展への長い列を横切って東博に入る。この門はダンテの「地獄門」を思い出させる。突然シーンとして「聖地」だけれど「生気」がない。

まるで「博物館の明治村」だ。本館は「北京の紫禁城」を理想としながら巨大な総にシャッターの降りた官庁ビル」で、表慶館は「結婚式ケーキスタイル」で百年後、これだけが残るだろう。東洋館は「体育館そのまま」。法隆寺宝物館は「一昔前によく見られた市町村の役場」。一番ボロくて湿度管理ができないため一週間に一回しか開かない。

中に入ると展示物は国宝級で見事だが、囲かれた環境は「経済大国日本にしては信じられないほど貧相」。青白い蛍光灯、ペンキ塗りケース、リノリウムの床、さびた窓枠。「三十年前の横浜の下町にあった小さな雑貨店」を思い出す、ところの日本美術愛好者はいう。

美しいより難しい。墨絵には「渡唐天神像」としか説明はないし。あっても「縄文時代後期から晩期に相当する前期の土器」とかチンプンカンプン。東博は展示館ではなく「倉」らしいと気づく。「今の東京の若者があんな貧相で『慰』なところに行くわけがないと思います」

無邪気に、ユーモラスに、愛をこめて、よくぞ言ってくれたものだ。

（森まゆみ）

◆ 読む・ガイド ◆

（付記した以外の月刊誌はすべて４月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
アメリカを揺るがす悪夢のスキャンダル「核」人体実験	福田みずほ　バート３／14	葬りさられそうだった冷戦の裏側を暴いた三人の女性
「核時代」が終るとき	広瀬隆　バート１／10―２／28	脱原発の先進国、ドイツから日本の原発政策を考える
原発はもう脳死状態！	槌田敦　宝島30　93年12月	通産省のマル秘報告書は天然ガスの有望さを指摘する
検証・「日本核武装必至論」	岸本康　中央公論３月号	疑念を払拭するために日本は何を主張すべきなのか
特集　遺伝子の時代	日本の科学者３月号	遺伝子の「よい・悪い」は誰が何をもって決めるのか
来たるべき政党政治の時代	北岡伸一　中央公論	イデオロギーが終焉し、リーダーの権力闘争の時代に
細川「改革」政権を中間決算する	Ｒ・Ｃ・エンゼル、安藤博　世界	政治を身近なものにしたが官僚支配打破への道は遠い
憲法栄えて国滅ぶ	片岡鉄哉　Voice	日米は神経戦に突入し日本は荒野に一人で立っている
日本は核武装する	ケネス・ウォルツ諸君！	多極システム下、日独の核武装への抑制心は続かない
新たなアジア主義の危うさ	鈴木健二　エコノミスト 3／15	若手官僚がひかれる小沢一郎、小倉和夫氏の脱西洋論
アメリカ企業の復活は本物か	中谷巌　THIS IS 読売	企業もキャッチアップ型からパイオニア型への転換を
わが「転向」	吉本隆明　文藝春秋	「小沢一郎ファシスト論」の雷同者こそファシストだ
フィリピン、ビルマの独立と日本の大陸進出について	林健太郎　正論	日本主導で行われた独立は本当の独立であったのか
コメと日本人	網野善彦、宮田登　現代	「日本人とコメ」の思い込みには国家の関与が大きい
〝日本病〟五つの症状	菅原真理子　中央公論	「嫌勤気分」の拡大や市民モラル喪失にどう対処する
小特集　いまどきの日本共産党研究	伊藤輝夫、中野翠他　宝島30	ガラパゴスの動物のように唯一不変の理念を持つ政党
犠牲―わが息子・脳死の11日	柳田邦男　文藝春秋	自死を選んだ二男が自分に託したものは何だったのか
まんがに媚びる文部省	大塚英志　諸君！	まんがは巨大化したがあらゆる点で未熟なメディアだ
筒井康隆「無人警察」抗議をめぐる全経緯	永井瑞江　創	断筆のきっかけを作った抗議文の筆者が顛末を報告
徹底検証「言葉狩り」と差別	週刊文春２／10～	メディアが言葉を抹殺していいのか、をキャンペーン

雑誌を読む

4月

細川政権の評価と次の課題

森まゆみさん　今月の月刊誌は細川首相の辞任表明前にできていたのですが、細川政権について山口二郎さんの「官僚政治から議会政治へ」（世界）が、自民党一党支配から脱したことは高く評価しています。一定の成果はあったけれど、今後は官僚をチェックして議会政治に持っていかなければならないと言っている。

田中明彦さん　細川政権の次の課題として官僚の政治支配をどう変えていくかに議論を進めようとしたのが「世界」の山口さんと新藤宗幸さんの論文です。でも、官僚政治を変えていくには今のような弱い基盤の政権では難しい。

橋爪大三郎さん　山口論文は細川政権について、実のある政策の立案は官僚機構の力なしには不可能で、本格政権への意欲を強めれば強めるほど志と矛盾して官僚機構への依存が強まる、というジレンマを指摘しているんですが、そう言い切ることには疑問もある。コメ開放の意思決定は、官僚機構内部でも解決のつきにくい問題だったのを政治決断することになったわけだし、いくつかの局面で指導力はあったのではないでしょうか。

田中　私は細川政権ができたときにも言いましたが、この政権は政治改革を実現することのみを大義名分とした政権で、とにもかくにも政治改革法を通したのが第一の特徴です。これで長期的に日本が変わっていく基盤ができた。

橋爪　私もそう思います。政治改革法は国会を通りましたが、本当の政治改革に結びつくには、この制度で何回か選挙をやって、政権担当能力のある政党や政治家集団を形成し、国民の選択肢として機能するようにならないといけない。細川さんは改革のイメージと人気で政治改革法を通したんですが、その結果、政策協定を結び意思一致した政治家集団を作って次の選挙に備えるという課題が出てきた。今回、政治手法、理念の違いをめぐって、本来起こるべき争いが起きたといえます。

田中　連立合意の中で自民党と違った唯一の点が政治改革法を通すことですから、政治改革法が通った後も細川政権が続くことは問題をはらんでいた。新しい政策合意に基づいた政権を定義し直さなければ国民に対して不正直とも言えます。

森　私はお二人と意見が違って政治改革法に反対ですが、その点では「世界」の田中英紀子さんと蟬峻淑子さんの対談「政治にとって一番大切なこと」が面白かった。田中さんは教育、老人問題など蟬峻さんに近いことを言っていて、小選挙区制で民意を反映した政治家が選ばれるかについては強い疑義を表明している。私はこの意見に近い感じを持ちます。それと西部邁さんが今月創刊した月刊誌「発言者」の「砂上の楼閣に翻弄される日本」で批判してますが、コメについても論議なき状態で突然輸入された。「サンデー毎日」（4／24）の「『地方分権派』旗手の挫折」で岩国哲人さんのコメントがおもしろい。

森　まゆみさん

森　細川さんが辞任したことについての評価は厳しいという人と半々で、大宅映子さんは「週刊読売」（4／24）で「敵前逃亡」と批判していた。

橋爪　辞任については、概して政治のプロに大変評判が悪い。でも国民にはそれほどではないようです。

田中　プロ風の言い方ですが、日本の政治力をつけるという面では好ましくない面がある。仮に将来、日本が危機的な状況の時に、決断力に富む重要な政治家を軽微なスキャンダルでやめさせなければならないのかという問題が残る。

田中　明彦さん

森　細川佳代子さんが「夫・細川護熙の秘密」（文藝春秋）で書いてますが、知事をやめた時、政治はもうやめてのんびりしていたいと思ったのに、行革審に引きずりこまれてやる気がでちゃったそうなんですが面白い人ですね。

田中　中曽根康弘さんが「中央公論」の「いまのままでは日本が危ない」で細川さんを八方美人だといっている。田原総一朗さんが、風見鶏と八方美人的な対立軸がなくなった時代に中選挙区制を維持していると、五十人以下くらいのグループがいっぱいできてしまう。首相選びは単なる組み合わせの問題になって、国民は関与できない。細川さんが首相になった時もそうだし、今回の羽田さんか渡辺さんかについても国民の意思は全く反映しない。

橋爪大三郎さん

橋爪　確かに過渡期ですが、細川さんはその中でやれることは大体やって、やれないことだらけになったのでやめた。そういう力学だと思う。やれることをやった点で評価できる。西部さんなどは批判していますが。

田中　西部さんが批判しているのは細川さんというよりそれを支持した国民とメディアですね。

森　私はめずらしく西部論文に共感しましたが、七〇％の支持率もメディアが作った細川人気ということがあります。よってたかって細川政権を持ち上げていた。

田中　大失政と言えるものはない。あえて言えば日米会談がうまくいかなかったことですが、日米交渉については宮沢内閣が作った枠組み自体が失敗の芽を含んでいたという弁明の余地もある。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

自由帳

大学の「五五年体制」

不況のなか、リストラやリエンジ（ニアリング）にもまれる中高年サラリーマン。彼らに、会社人間から脱却して、起業家精神を持てと呼びかける論調が今月は目立った。が、話はそう簡単だろうか？

私の勤め先は理工系の大学だが、学生の起業家精神が育っているとはとても思えない。アメリカの大学には、特許をとって会社でも作ろうという若者がうじゃうじゃいるらしいが、日本の大学生はおとなしくて、大企業で研究を続けられれば、などと思っている。

いちばんおかしいと思うのは、文系／理系の垣根だ。理系の人間は、新製品をつくります、文系の人間は、それを売りさばきます。互いに就職すれば何とかなるという予定調和なのだ。企業を離れて自立しようにも、ひとりでは何もできない。文系／理系の区別は、偏った知識を身につけさせ、大学卒業生を企業に依存させるための仕組みなのである。

この仕組みは、冷戦の枠組みが固定していて、企業がただ大きくなりさえすればよかった時代の遺物である。企業の社会的責任や政治改革はそっちのけで、国際社会の枠組みをアメリカに任せきりでやって来た五五年体制の副産物でなくて何だろう。

今回の不況が長びいているのは、産業構造の転換を迫られているからだ。日本企業はもはや終身雇用でやっていけなくなっている。会社人間はとっくに時代遅れなのだ。だから転職市場が少しずつでも拡大しているのは、よいきざしと言うべきである。

それなら大学も変わるべきだろう。まず、文系／理系の垣根をとり払おう。専門の学力をみがくのはもちろんだが、それ以外の分野も副専攻などのかたちで系統的に学べるようにする。

MITや清華大学は理工系大学だけれど（だからこそ）、理・工・文の三本柱でやっているという。日本も見習うべきだ。大学の五五体制よ終われ、と私は言いたい。

（橋爪大三郎）

◆ 読む・ガイド ◆

（付記した以外の月刊誌はすべて5月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
官僚政治から議会政治へ	山口二郎　世界	政党政治対官僚政治という大きな対立軸を見落とすな
砂上の楼閣に翻弄される日本	西部邁　発言者	無思想、無責任の細川内閣は日本を混乱に陥れている
「政治の実験」の火を消してはいけない	新藤宗幸　エコノミスト4/26	手続き民主主義の尊重が政治の実験を継続する生命線
夫・細川護熙の秘密	細川佳代子　文藝春秋	「ああ、このひとは普通の感覚じゃないんだなぁ」
外政無知をさらけだした細川内閣	野田宣雄　発言者	米国の思想戦略に対して外政の文明的位置づけを急げ
喜劇だった日米決裂	大前研一　Voice	史上最良の状態にある日米関係に修復の必要はない
日本のしなやかな孤独	江藤淳、高坂正堯　文藝春秋	日米摩擦は本質問題にせずにゲーム化することが必要
「リベラル」大バーゲン時代	加藤尚武　諸君！	日本の「リベラル」は単なる多数派工作のシンボルだ
民主主義にとってリベラリズムとは何か	井上達夫、嶋津格　現代思想4月号	利益政治的民主主義に代わる民主主義モデルの構築を
現代ヨーロッパをどう読むか	梶田孝道　季刊アステイオン春号	合理主義、ポストモダニズム、原理主義の併存と困難
文化は宿命である	リー・クアンユー　中央公論	アジアは西欧を必要とするがすべてを欲してはいない
理念なき人員削減が日本を潰す	奥村宏　サンサーラ	リエンジニアリングは本当に企業を再生させる手段か
リストラ列島の表情　明日なき管理職	鎌田慧　世界	管理職組合が当たり前になるような世論化が必要だ
50代管理職を襲う「定年引下げ」の嵐	滝田誠一郎　現代	自由定年制の下でもしたたかに生きてゆく人生設計を
サラリーマン評論は本当に役に立つのか？	松原隆一郎　宝島30	企業の外でもコミュニケートできる能力を持つこと
平成不況下、わが執念の経営術	中内功　宝石	今もどんどん店舗を増やすのは価格を下げるためだ
変容する「家族」の絆	野田正彰　潮	家族制度は経済効率主義にひきずられてねじれている
特集・差別	安岡章太郎他　海燕	差別と表現の問題をそれぞれの場所から重層的に語る
現代犯罪論で　バブルののちの犯罪像	別役実、芹沢俊介、山崎哲　世界	「犯罪についての言葉」が失われてきているのは困る
特集・スキャンダリズムの開祖・まむしの周六	高橋康雄他　広告批評4月号	徹底した大衆性に立脚した理想主義があった時代

雑誌を読む　5月

日本にとっての「北朝鮮」

森まゆみさん　北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）についての知識は普通に暮らしている日本人にとっては少ないと思いますが。

橋爪大三郎さん　最近のある調査によると「関心のある国際問題」のナンバーワンが北朝鮮問題です。

森　それだけ急速にメディアが取り上げているからかもしれません。秒読み〟を煽っている「Voice」などは本当に事実に基づいて書いてるのだろうかという気がします。

田中明彦さん　日本人は朝鮮半島全体について知識が少ないんですが、北朝鮮については特に少ない。しかし、それは世界中がそうです。知ろうとしても教えてくれない。それがこの問題の本質的なところです。こんなに世界に対して閉ざされている国でなければ周りの国が怖がる必要はない。

「この問題はどういう問題か」と、「日本はどう対処したらいいか」と、二つのテーマに分けられますが、最初の点についての特徴は、積極的な北朝鮮擁護論があまりないことです。北朝鮮は核開発をやってないのにかかわらず米国がでっちあげているとか、核開発には十分な理由があるという議論は少ない。冷戦時代と比べると大変な変化です。次の「どう対処するか」という問題で対立が出てくる。一つの立場が山本剛士さんの「日本外交がなすべきこと」（世界5月号）と、吉田康彦さんの「国連も加担する北朝鮮バッシングの危険性」（サンサーラ）です。

山本さんは、日本が何か独自にやることがあったのではないか、と言っていますが、問題の本質を見誤っていると思います。北朝鮮がアメリカとしか交渉しないと言っているときに、日本が国交正常化交渉を始めようとしても、おそらく核開発問題についてアメリカが成し遂げるかもしれない外交成果に対する雑音にしかならず、悪くすると北朝鮮に誤った判断をさせる危険がある。吉田さんの議論もIAEA（国際原子力機関）の内部事情については的確だと思いますが、日本政府のすべきことについては、ほとんど建設的な議論はないと思います。

森　吉田さんが、核拡散防止条約（NPT）は米ソ英仏中の核大国だけを特権化する体制で、さらにインド、パキスタンなどについてはきちんと査察しないで北朝鮮に対してだけ査察にこだわるのは本来おかしいと書いていますが、私はそれは正論だと思います。

田中　NPT体制に対する批判はもっともな批判です。アメリカや核兵器を持ってる国を別にして、それ以外の国だけ査察を受けるという体制は、どう考えても不公平、不平等極まりない。ただ、そういう悪い体制であっても、全然なくなって、すべての国家が平等に好き放題に核兵器を持てるようになるのに比べたら、ずっといいと私は思います。

橋爪　NPT体制は冷戦の副産物で一部の核大国がいばっていた。だけどそのことで一番利益を受けたのは日本です。アメリカの核のカサの中に入っていて、核武装しなくて済んだ。日本が今後も核武装する気がないのであれば、核が拡散しないという条約に加盟し、他の国も核を作らない体制にした方がいいのです。

左から田中さん、橋爪さん、森さん

森　私は自衛権はあると思うし非武装中立一本やりでいいとは思わないんですが、冷戦構造の中で形成された自衛隊が冷戦後、どうあるべきなのか、国民の中に提起してみなで考えるべきだと思います。

橋爪　それはその通りだと思います。

田中　北朝鮮の有事を想定することが日本を軍国主義化してしまうというような議論をする人がいますが、私は違うと思います。

森　五十嵐武士さんの「日本は21世紀をどのように生きるのか」（世界）は、ナショナル・アイデンティティーとしての平和主義を保持しながらハードな軍事力でなく情報分析や医療などソフト面で貢献しようといっていて共感しました。

橋爪　まず、北朝鮮と韓国が分断され対立していることそのものが、日韓併合などや終戦時の不手際などの結果であり日本の責任だったということをよく考える必要がある。次に朝鮮半島で韓国・朝鮮民族が将来どういう国家を作っていくかは、日本の将来にも大いに関係があると認識すべきだ。そういうふうに自分の問題として考えないとどうしようもない。

田中　石川好さんの「日本は『イスラエル』になれるか」（フォーサイト）は面白いんですが、戦争が当然始まって日本が参戦するというふうに議論がいくのは先走りの気がします。今備えなければならないのは、経済制裁をする事態になったときに、どういうことが法的な面で問題になるか。どういうことができるか。できないのがあれば、どういうことをできるようにすべきか、の議論です。

橋爪　石川さんが、朝鮮半島でいざ紛争が始まったら、在日韓国・朝鮮人の安全を徹底的に守らなければならないと指摘していますが、忘れてはならない論点だと思いました。

森　吉原恒雄さんの「国際常識に従った法解釈をすれば自衛隊の行動は可能」（中央公論）は、日本が参戦する前提として、国際社会が経済制裁せざるをえなくなった時にどうするのか、という議論の立て方が多い。

森本敏さんの「国家の危機管理体制を確立せよ」（フォーサイト4号）は、それなりに冷静な議論です。「Voice」の岡崎久彦・伊豆見元対談は最悪のケースを想定しているわけですが、私にはかなり現実的な判断に近い気がしました。ただF15が百何十機もあるのに行かなくていいのかというのはちょっと荒っぽいですが。

橋爪　危機管理というのは、まともな政府ならやらなければならない。そうでないと国民の安全が守れない。それに関して現在の法制が不備かどうかについては二つ説がある。吉原恒雄さんは「有事の際に国内法でどこまでできるか」（中央公論）で、現行法で大体できると言っています。岡崎さんなどは不備だと言っています。私は不備に決まっていると思いました。

田中　解釈が分かれるのは、世界的な常識に従うか、日本で今まで行われてきた安全保障の厳格な法解釈に従うかです。岡崎さんや森本さんなど政府にいたことがある人は現行法に懸念があるというようです。

自由帳

「ことば」の政治へ

過剰な期待は幻滅を生む、というのが細川政権崩壊に関するいくつかの論考を読んだ感想である。日本新党解党宣言」『文藝春秋』）や田勢康弘「細川護熙最後の日々」（同）に、当初の期待の高さと現在の幻滅の落差がよく現れていると思う。

しかし、後に幻滅を生む程の過剰な期待と熱気があったからこそ、五五年体制を一挙に崩壊させ、政治改革法を成立させることが可能になったとも言える。細川前首相の政治的資質やスタイルについての疑念は、細川政権成立時にすでに指摘されていた（松崎哲久「『わが日本新党』との決別」『中央公論』九三年八月）。それにもかかわらず、多くの人々は、細川首相に過剰に期待し、過剰に支持を与え、その結果、日本の政治は変わった。冷徹な人々ばかりでは、変革はできない。

とはいえ、変化をすれば政治が良くなるというものではない。政治改革の第二幕では、変化の中身が問われなくてはならない。先月の雑誌では、社会党の連立離脱までの動きはフォローされていない。そして、最近の動きを見れば、社会党が連立を離脱したからといって、自社連携による五五年体制の復活が容易ではないことが明らかになった。やはり、政策を詰めていくことによって、新たな政界再編への流れは動いているのであろう。

その際、政策の中身はテレビ映りやイメージではなく「ことば」で言い表さなければならない。その意味で井上ひさしの議論は全く正しい（「宰相の条件」『文藝春秋』）。しかし、国民に、「ことば」を中心にした政策論の是非を問うためには、何としても、中選挙区制の選挙を再び行わせるのを阻止しなくてはならない。中選挙区の選挙では、政策論による対決ではなく、後援会型の旧来の選挙になってしまう可能性が高いからである。一刻も早い区割り法の成立と、新制度のもとでの選挙が望まれる。中選挙区制での選挙を主張する者は、「守旧派」であるか、「ことば」を信頼しない者であろう。

（田中　明彦）

◆読む・ガイド◆

（付記した以外の月刊誌はすべて6月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
有事の際に国内法でどこまでできるか	吉原恒雄 中央公論	国際常識に従った法解釈をすれば自衛隊の行動は可能
北朝鮮は自分から手を出さない	重村智計 中央公論	言葉の力を信じる北朝鮮は名分のない戦争はしない
日本が参戦する手順	岡崎久彦、伊豆見元 Voice	どんな事態が起きても日米同盟を崩してはいけない
国連も加担する北朝鮮バッシングの危険性	吉田康彦 サンサーラ	北朝鮮の核開発は人畜無害であり国連の制裁は筋違い
国家の危機管理体制を確立せよ	森本敏 フォーサイト4号	緊急事態への備えが必要、政府は国民に適切な説明を
日本は「イスラエル」になれるか	石川好 フォーサイト4号	仮に日本にミサイルが飛来しようと耐えるしかない
日本外交がなすべきこと	山本剛士 世界5月号	まず日朝国交正常化交渉を再開し信頼の醸成をめざせ
交渉こそが最も有効なアプローチである	R・ソロモン他 世界5月号	軍事紛争は避けることができ、交渉の道こそ生産的だ
朝鮮半島有事と「保守革命」の行方	姜尚中 週刊金曜日5／20	「保守革命」へのテコとして「危機」が待望されていた
日本は21世紀をどのように生きるのか	五十嵐武士 世界	安全保障問題を正面から考える「平和国家パートⅡ」を
細川護熙最後の日々	田勢康弘 文藝春秋	政治リーダーとしての資格欠如が政権崩壊の最大原因
細川護熙の駆け抜けた時代	山口二郎 THIS IS 読売	重要課題を放置し性急に本格政権に移行しようとした
細川政権とは何だったのか	佐々木毅 中央公論	これから登場する政権も「改革」を否定できない
見破ったぞ！　小沢一郎の秘密	テリー伊藤 VIEWS5／11	天才テリー「嫌悪感を持たれる男」の記者会見に乱入
資本主義再入門	橋爪大三郎 広告批評5・6月号	米中の異質な資本主義間の文化闘争が大問題になる
中国軍拡説は真っ赤なウソ	田岡俊次 諸君！	中国の軍事予算は乏しく、台湾との戦力差も拡大した
「常識」が次々に覆る脳研究最前線	伊藤正男、山根一真 現代	小脳は運動だけでなく思考も肩代わりする機能をもつ
永田洋子と消費文化	大塚英志 諸君！	無防備な「少女趣味」が突然「革命思想」に出合う悲劇
特集　ポルノな気分	クレア	女性ヌード写真集「YELLOWS」を男性で作ると
女が感じるポルノ、男が感じるポルノ	自由時間5／19	男と女ではAVを見た時の感じ方、興奮の仕方が違う

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）

1994-2-6/18

雑誌を読む

6月

平和主義と日本の選択

森まゆみさん　林健太郎さんの「『永野法相発言』を考える」（文藝春秋）は、先の戦争は侵略戦争だったと言いつつ、細川前首相の謝罪発言については「国際法的に決着がついてることを蒸し返した」と批判しています。でも私は細川発言は評価できると思います。それが、内閣が変わるたびにぐるぐる見解が変わるようでは不安です。

橋爪大三郎さん　私は林論文はバランスが取れた議論だと思いました。日本人が過去の戦争について済まない気持ちを持つのは当然だけれど、国家同士の関係とはレベルが違う。講和条約で賠償問題などが解決しているのであれば、政府の首脳が個人的な心情から謝る必要はないし、してはいけない。もしもアジアとの関係をさらに強化するため、改めて補償しましょうという覚悟で謝るのなら、政治的選択として意味がある。もちろん、従軍慰安婦問題、香港の軍票問題など民間人が被った損害、講和条約で手当てできない問題は別に解決していく必要がある。

田中明彦さん　林さんの細川発言批判は、現実政治的でないと思います。細川発言によってアジアの多くの国で「日本もやっとこの戦争について本気で謝る気になったのか」という見方が実際に広がったし、日本にとっての国際環境が良くなったことも事実です。その点で林さんの批判は間違っている。永野発言で細川発言がニセモノだったと思われるとすれば、著しく国益に反すると思います。

森　羽田首相の国会答弁を聞いていると、必ずしも侵略戦争とは言えないとかあいまいな言い方です。細川発言をそのまま踏襲しているとは思えない。かなり後退している。

橋爪　それは林さんが言うように、歴史学者の責任もありますが、国民として事実が何であったのかを追究していく姿勢が基本だと思います。そうすれば、被害や虐殺がなかったという議論は成り立たないし影響力を持つはずがないですから。

森　坂本義和さんが「平和主義の逆説と構想」（世界）で、市民の側も含めて「自分たちで戦く」ことが足りなかったということを述べているのは、その通りだと思います。

橋爪　坂本論文と米原謙さんの「政治にとって理想主義とは何か」（世界）が平和主義を論じています。戦争から日本人は教訓を受け取り、その帰結として平和主義、社会党に代表される非武装中立論を生んだ。私は、一人ひとりの行動や判断が明確なルートを通じて国家意思の形成に影響力を持てるという確信が、戦前にもなかったし、結局戦後の人々も持てなかった。それが平和主義という抵抗勢力につながったと思うんです。政府はいつ戦争や悪いことをするかわからないので徹底的に闘えばいいが、自分たちがどう政権に参画したり国家意思を形成したりするかは漠然としていて、非現実的な態度に終始した。

森　まゆみさん

橋爪大三郎さん

田中　明彦さん

田中　坂本論文は、平和主義があったために、親米反ソではあるが権威主義的反民主主義的反共体制という米国の多くの同盟国のような歴史をたどらなくて済んだ、という評価です。平和主義そのもののメリットではなく、平和主義の反射として、日本の民主主義体制が守られたというんですが、日本の政治体制、日本人に対する不信感が強い。

森　でも市民運動とか、六〇年安保などで平和主義を訴えてきた人がいて、それで、逆コースを阻止してきたというのは、感覚的にはその通りだと思います。

田中　もし一九六〇年ころに、日本の社会党がドイツ社民党のような現実主義的な路線転換をして、米国との同盟を認め、日本の自衛隊の存在もそれなりに認めて、そのうえで政府をチェックするという路線転換をしていたら民主主義が守れなかったとでもいうのでしょうか。

橋爪　そんなことはなくて、はるかに強力なパワーを持てたと思います。現実的な福祉政策を掲げていたら、自民党を凌駕する議席を取っていたかもしれない。

田中　非武装中立論という政治勢力を担った人には、何をすれば平和になるのかという理論、平和論がなかった。冷戦が終わった時に、国連は平和のために何の貢献ができるかということで混乱状態になった。平和主義を主張するなら国際組織を通じた平和の達成を真剣に考えなければならない。一方、非武装平和論はその理論の弱さの故に国民の間の孤立主義的な感情にうまくマッチした。とにかく国際的なことは面倒だし危ないので関与したくないという、孤立主義的感情を非武装平和論は正当化してくれたんです。

森　むしろ、私は坂本さんみたいな人がよくここまで言いたと思います。護憲革新勢力の側も混迷しているといって、社会党の形骸化した非武装中立ではない新しい考え方を持たなければいけないと言って、古典的PKOならいいと言っている。

田中　それはそうですね。

森　島田晴雄さんの「『大国』日本、四つの選択肢」（諸君！）は、日本の今後の政策のあり方として二つの軸を示しています。アメリカとの距離と、経済構造改革をするかどうかですが、アメリカとの関係についての島田さんの考えがはっきりしない。

橋爪　アメリカとの関係は重要です。ニューズウィーク6／15の「アジア核ブーム」は、欧米系の人の日本に対する見方を知る上で興味深い。プルトニウムを貯め込めば、核武装の可能性を疑われるものなんです。島田さんはアメリカと距離を置くのが理想的だと言いますが、やめたほうがいい選択だと思います。それは日米安保の解消を意味してしまうかもしれず、米国が日本を潜在的な核武装国と見て警戒するようになるでしょう。

田中　私は選択の軸は、国際的関与を深めるのか、それとも孤立主義でいくのか、だと思います。国際的な関与を深める中で日本の利益や平和を守ることを考えた場合、アメリカと密接に協力しないという選択はあり得ない。

森　島田さんがアメリカとの距離ということで言いたいことは、もう少しアメリカ追従でなく自主性を取り戻し、アジアとの協力を考えるということだと思います。

橋爪　それは日本さえよければというナショナリズムで、少し危険ではないでしょうか。

田中　問題はその選択が独自かどうかではなくて、正しいかどうかだと思うんですが。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽たなか・あきひこ　東京大学助教授（国際関係論）

自由帳

ジャクリーン・ケネディ・オナシスは私たち元少女の〝お姫様〟である。ちょうど一九六〇年ころ「少女フレンド」や「マーガレット」が創刊され、私たちは毎週のように、ジャクリーンのドレスやパーティーに憧れ、カメラマンのキャリア、ケネディとのロマンスの読み物に夢中になった。ベトナムへのゲリラ部隊派遣やキューバ危機ではなく、それが私たちのアメリカだった。

眉毛が濃すぎ、目が離れすぎ、エラの張ったジャッキーはそれほど美貌とは思わなかったけれども……。

「ニューズウィーク」（6／1日本版）がカバーストーリーで「偶像から伝説へ」の彼女の波乱の人生を振り返る。「文藝春秋」には萩原絹代「ジャクリーン夫人晩年の孤独」がある。「匿名性を三十一歳で失うのは本当に恐ろしいことだわ」とファーストレディーになった直後の言である。以来死ぬまで、彼女はマスコミに左右されず、完全に無視した。

偶像から伝説へ

ケネディ暗殺で〝悲劇のヒロイン〟になり、海運王オナシスとの結婚で〝堕ちた偶像〟となった。「何よりショックだったのは彼女がカエルみたいな男と一緒になったことだ」（ニューズウィーク）。

しかしオナシスは「ユーモアもあり知的で魅力的な男」（ルイス・オーチンクロス）で「未亡人の美徳から彼女を蘇生させるにはちょっとしたスキャンダルが必要なんだ」といった。

しかしオナシスも死に、ニューヨークに戻ったジャクリーンは「金持ち女が働くことはないのに」と揶揄されながら、二十年、有能な編集者であった。Tシャツにスラックスでセントラルパークを歩く彼女はスレンダーでさっそうとしている。「編集者は前に出ない仕事だから好きだわ」といい、自伝は書かないのかと聞かれれば「九十歳になったらね」と笑った。

五月十九日、リンパ腺がんのため自宅で死去。タフで自由な人生だった。

「立派に二人の子を育てて弁護士にしたんだってね」と女友達が感心する。この「母のかがみ」（ニューズウィーク）という新しい神話を、私は好きではない。

（森まゆみ）

◆読む・ガイド◆

（月刊誌はすべて7月号）

タイトル	筆者と雑誌	ひとこと
平和主義の逆説と構想	坂本義和　世界	平和主義が政治体制の民主化に大きな役割を果たした
政治にとって理想主義とは何か	米原謙　世界	社会党生き残りには非武装中立政策の見直しが必要だ
「大国」日本、四つの選択肢	島田晴雄　諸君！	米国との距離、経済改革の2つが戦略的政策選択軸
「永野法相発言」を考える	林健太郎　文藝春秋	侵略戦争というのは自明だが、戦前暗黒史観も問題だ
戦後民主主義が生んだ永野発言	佐藤健志　発言者	見当違いの永野発言は逆に東京裁判史観を補強する
改憲志向の中の永野発言	浅井基文　世界	永野発言は総保守化を背景にした改憲策動の一環だ
アジア核ブーム　第2の北朝鮮が現れないか？	ニューズウィーク日本版　6／15	核に熱中するアジアはプルトニウムの貯蔵庫になる
シミュレーション　朝鮮半島暴発	桃井真　THIS IS読売	日米韓政府機関の機密資料で描いた7つのシナリオ
クリントンは戦わない	片岡鉄哉　Voice	米国による制裁なしに北朝鮮の核大国化は防げない
アメリカとぶつかる異端の論理	小此木政夫他　エコノミスト6／21	米国中心の国際秩序の中で異端国家とどう付き合う
「外交を知らない」二つの大国	高坂正堯　季刊アステイオン　夏号	自国の原則を振り回す米国と提案も貢献もしない日本
中華帝国は分裂するのか	G・シーガル　中央公論	中国の急激な経済発展と分権化が分裂要因を内包する
保守再合同待望論	松崎哲久　中央公論	自民党と新生党の合併で強力な政権を作る必要がある
座談会「差別語」の背後にあるもの	崔洋一他　週刊金曜日5／27	被差別者の「表現の自由」が忘れられていないか
筒井康隆氏はやはり間違っている	浅田彰、井田真木子　諸君！	マジョリティーというからにはある程度の度量を持て
ベストセラー『完全自殺マニュアル』の「殺意」	切通理作　諸君！	世界を破滅させたいという子供じみた殺意とその反転
妄想と犯罪	佐川一政、小林よしのり　創	マスメディアの人形としての生活から抜け出せるのか
ゴーマニズム宣言・佐川クンに倫理を聞く	小林よしのり　SPA！6／15―22	佐川一政は自主的に割礼して世間全部に闘いを挑め
全米に広がる若者ギャングの実態	越智道雄　世界週報　6／7	中流化から脱落したマイノリティーの暴力が拡大する
特集　カラオケは世界のかたちを変える	関川夏央他　思想の科学	だれもが持つ「文化の檻」がカラオケに行けばわかる

1994-2-7/18

雑誌を読む　7月

自由帳

村山政権、不安と可能性

森まゆみさん　村山政権の評価についてはさまざまな見方がありました。「ニューズウィーク日本版」（7／13）の「アンビリーバブル！　日本政治」は大変な懸念を表明しています。北朝鮮には行ったのにワシントンには来たことがないとか、社会主義者が率いる自民党政権とか。日本では「週刊金曜日」（7／8）の同じ特集の中にいろいろな評価がありましたが、混乱している印象です。

橋爪大三郎さん　国民の率直な反応は驚きだったと思います。「そういうことがあっていいのか」という、皮肉で辛辣な驚きが基調にある。内閣支持率も極めて低く、冷淡に模様眺めをしているようです。一方、外国の論調は全体として「最悪の選択」という失望感です。原因の多くは社会党にあって、まともな政党とは扱われていない。

中西輝政さん　外国の新聞雑誌は最初はまさに「アンビリーバブル」という反応だったのが、サミットでの日米会談が終わってみると、東京発の第一報と比べてそれほど悪くもないという反応になった。国民の方は、自社連立に対する抵抗感や、政策問題での消極評価の一方で、指導者のパーソナリティーや行動でのプラス評価もあるという、分裂した見方です。

森　トップのキャラクターで考えるのは、面白いようですが、危ない気もします。村山さんの故郷の町議、稲生孚さんが「え！　トンチャンが総理大臣に？」（エコノミスト7／12）で書いていますが、愛すべき人で私腹も肥やしていないかもしれませんが、私たちの生活と関係がない気がする。

石川真澄さんが「世界」の「政治不信に向き合う政治を」で書いていることは社会党に対して非常に厳しい。政治の根幹についての不信を国民に植え付け、政策などどうにでも変わり、連合の相手もその都度変わるなら、国民が政党を選ぶ基準がなくなると。

中西　政治ゲームの観察者として見れば、この政権は意外と長く続くかもしれない。政権基盤が安定基盤としてあって多数がえやすい。三党の連立維持の意思も強く、結集力がある。しかし、予見できない外交安保問題が浮上してくるときにはもろさが出てくると思いますが。さらに、社会党が自衛隊合憲の立場をはっきりさせれば大変大きなインパクトがあります。

橋爪　数から言えば確かに安定している。ただそれも、社会党の今までのアイデンティティーを骨抜きにしていくことが条件になる。北朝鮮やPKO、自衛隊など重要な問題で、社会党が従来のようなことを言えばたちまちパンクするわけですが、しばらくは言わないでしょう。もう一つの条件が選挙です。選挙が当分先であるからこその安定で、逆にいえば選挙を先のばしにしないと政権は続きにくい。そういう意味では、政策論争がきちんとできない政権だと思います。

中西　今の日本では、例えば区割り法案ができた時にすぐに解散することが、議会政治の原則でつねにフェアな道かどうか。そういう基準を持っていない。また、労働組合が、政治にダイレクトなかかわりを持っていますが、連合がどうなるという政局観だけでなくて、労働団体と政治という議会制の基本に帰った議論が大切だと思います。

森　まゆみさん

森　田中直毅さんが「村山連立政権、三つの採点基準」（東洋経済7／16）で、ハト派・タカ派という分け方が冷戦的発想で古いと指摘していましたが、用語そのものも揺らいでいるんですね。田中論文には異論のある所もありますが、全体として面白かった。

橋爪大三郎さん

中西　輝政さん

回避できた」（週刊金曜日）で、ハト派のリベラルな人たちの結集ということを書いていて、好感を持ちました。

橋爪　海部リモコン内閣が最悪で、村山内閣がそれよりよいかどうかですが、リモコンという点では、どっちもどっちです。村山さんは人柄のよさそうな隣のおじさんという感じですが、政治家としての履歴をみると、緊急な政治判断を迫られた場合に不安がある。

中西　吉冨勝さんの「エコノミスト」（7／19）の「超円高＝景気失速を防ぐために利下げを」では、政党のタカ派的かというと、そうではない。国際社会の安定、集団安全保障などについて理想主義的なものもある。こうした形の改憲論に、日本の伝統的なリベラル勢力は応えていません。ここにもねじれがある。

吉冨さんの議論に端緒的なものがありますが、経済政策は経済政策、安保政策は安保政策、生活者は生活者というふうに分けずに、全体を貫く軸を考えた論議が必要だと思います。「発言者」の西部邁さんの「保々連立が日本の政治を救う」も、保守主義的な見地から政治思想上のねじれをただそうという主張ですが、この考え方が今、多数派を占めることは難しいと思います。

橋爪　今回自民党と連立を組んだことが社会党として一番賢明な方法だったかどうかは疑問です。社会党にとっては中道と右派の社民リベラルの方向に現実的な社民主義政党としての可能性があったと思うわけで、左派主導で自民党と結びついてしまったことは後退だと思います。

森　私は小沢さんが嫌いなので、村山政権しかなかったと思う。後はできるだけ、ズブズブに自民党にすり寄らずにやってほしい。社会党が持っていた大衆基盤が切り崩されたら、市民運動などをやっている人は自分たちで政治を動かしていくしかなくなる。

中西　山口二郎さんが「『普通の国』に対抗する平和国家を」（週刊金曜日）で自民党が社会党の政権構想をのんだのだから社会党としてはそれを自民党に突き付ける形で政権を維持すべきだ、と言っていますが、党派的でない視点からも重要な指摘だと思います。連立における民主主義の手続き、習慣、伝統を作っていくという作業が重要です。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者
▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）
▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）

金正日氏の実像

金日成主席が急死した。世界の耳目が、後継者の金正日氏に集まっている。

金正日氏についての情報は、断片的で量が少ないうえ、矛盾している。いっぽうの情報によれば氏は、わがままな暴君で、酒好き女好きで、なにをしでかすかわからない危険な独裁者だ。わが国のマスコミが好んで増幅しているのはこうした人物像である。

もういっぽうの情報によれば、金正日氏は、聡明で開明的な指導者で、信頼に足る人物だという。本当はどうなのか。追悼集会でも沈黙を守った氏の実像は、ベールにとざされたままだ。

金日成主席の遺言となった南北首脳会談。これが実現すれば、金正日氏が交渉のテーブルにつくかもしれない。いずれにしても、対米外交を主導するキーパーソンなのは確か。主席の死後、クリントン大統領は「噂（うわさ）にまどわされてはいけない」とのべ、後継者の人物評価に冷静な態度を示した。米朝交渉を前進させたいとのサインでもある。

神格化された指導者で、国民がほとんど声を聞いたこともない――金正日氏はこの点、戦前の天皇と似ている。情報が乏しければ、好き勝手に人物像を描くことができる。戦時下のアメリカは、冷酷で野心的な独裁者という天皇像を流布させた。戦後は一転して、平和と民主主義を愛する学者天皇のイメージに与した。いずれもそのときどきの、アメリカの国益に即していた。

同じように考えれば、危険な暴君・金正日のイメージは、北朝鮮の核疑惑を国際社会に印象づけるのに好都合ではなかったか。そしてこれから米朝交渉を進めるのに、そろそろ別のイメージが必要になり始めたのかもしれない。

どんな人間にも、さまざまな面がある。その一部を取りあげて、悪魔だ、いや聖人だと騒いでも仕方がない。重要なのはまず情報を集めること。そして、ある人物のイメージが国際政治の力学のなかで増幅されたり変形されたりしてきた事実をわきまえることだ。

（橋爪大三郎）

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（月刊誌はすべて8月号）

森	❶日本人の自画像 ❷異色の父と子100組	柳原和子 中央公論 山口昌男、坪内祐三他　ノーサイド	❶在外日本人205人インタビュー。日本ではできない生き方がある❷あっと驚く面白親子を最強執筆陣で。ケタはずれ日本人集大成
橋爪	❶アンビリーバブル！日本政治 ❷連載〝エプロン大臣〟マッキーが行く！	ニューズウィーク日本版7／13 女性自身7／19～	❶社会党政権誕生に当惑と失望を隠さない西側マスコミ❷おいしい話題を見つけ出し連載まで組んでしまう女性週刊誌のずうずうしさ
中西	❶大国はどこへ行った ❷日本新党全議員インタビュー	E・ラトワック 中央公論 三木哲生 中央公論	❶冷戦後の世界秩序が混迷していることの深い原因を鋭くえぐる❷政治改革時代の理想と現実のコントラストを生々しく描き出す

◆ 読む・ガイド ◆

村山連立政権　三つの採点基準	田中直毅 東洋経済 7／16	日米、国際社会への基本姿勢、経済改革がポイントだ
超円高＝景気失速を防ぐために利下げを	吉冨勝 エコノミスト7/19	村山政権は人気取りで経済改革を遅らせる危険がある
意外に期待できる村山政権の経済運営	高橋乗宣 エコノミスト7/19	わかりやすい連立政権、税制でも結果オーライを期待
「普通の国」に対抗する平和国家を	山口二郎 週刊金曜日7／8	護憲勢力が性急な結果を追求すれば逆効果になる
保々連立が日本の政治を救う	西部邁 発言者	「保守対革新」の対立の構図は決して消滅していない
政治不信に向き合う政治を	石川真澄 世界	社会党が立ち直るためには閣外協力にとどまるべきだ
いっそ「渡辺＝小沢政権」が生まれればよかった	柄谷行人、浅田彰 サピオ7／28	憲法改正から徴兵制、そこまでいかないと目覚めない
日本外交の基本構造	高坂正堯 文藝春秋	外交力が下がる中で愚行を重ねる米国とどう付き合う
日韓で同時発表、「金正日家の謎」	週刊朝日7／29	スキャンダラスな噂話に彩られたこの人物の正体は
金日成主席父子の正体	高英煥 文藝春秋	こんな人物を後継者に選ばざるをえない北朝鮮の現実
マルチメディアの新・日米経済学	竹中平蔵 現代	情報通信革命で日米摩擦が一層激化する危険がある
ＪＲ東日本と言論出版の自由	清水英夫 諸君！	情報のコモン・キャリアーとしての責任を放棄するな
末期癌と逸見政孝さん	山崎章郎、近藤誠 諸君！	手術前の記者会見に臨んだ逸見さんが望んだのは？
闇に葬られた皇室の軍部批判	THIS　IS　読売	発見された参謀・三笠宮の〝危険文書〟は何を主張した
お笑い革命日本共産党	テリー伊藤 マルコポーロ	新著の予告編。共産党に親しみを感じさせる本だぞう

1994-2-8/18

雑誌を読む　8月

「戦後49年」を考える

森まゆみさん　八月なので戦後を考えるという取り上げ方に何か問題はないのでしょうか。その一方で、来年が五十年で区切りになったらもう取り上げられなくなってしまうのではないかという危惧も出されていました。

中西輝政さん　日本では年中行事化していますが、欧米でも昨年、今年と八月を強く意識しはじめています。ノルマンディー五十周年やアメリカでの原爆投下をめぐる議論です。冷戦のころは考える余裕がなかったのです。

橋爪大三郎さん　中国ではおそらく来年が五十年の大きな区切りだという意識はないでしょう。一九四九年に成立した国ですから建国五十年には間がある、朝鮮戦争もあった。アメリカもいろいろ戦争を経験しました。日本だけが戦争と言えばこの前の大戦のことで、毎年八月が来ると「忘れないようにしよう」の繰り返しですが、これでは風化し忘れられていくのは当然でしょう。山崎正和さんと粕谷一希さんの対談「『分断国家』日本の五十年」（THIS IS 読売）は、そんなワンパターンの戦争の論じ方ではもうやっていけなくなっているという問題提起をしています。

中西　九日の毎日新聞文化欄「『戦後の原点』からの問い」で桜井哲夫さんが橋川文三さんを引きながら指摘していましたが、日本の戦争経験、平和主義の理念は宗教的な意味合いを持っている。八月は先祖を供養する季節でもあり、宗教経験を反すうするわけですが、平和主義の理念を確認する面と、宗教的であるがゆえに歳時記化している面と、二面性があると思います。

森　「広告批評」の座談会「日本の戦争、世界の戦争」（猪瀬直樹、小川和久、前田哲夫、森毅）は面白い読み物でした。若い読者を対象に「関東軍」や「二・二六事件」などまで注を付けている。アメリカの若者は大学二年生でも戦術や軍事を勉強しているけれども、日本の若者は現代史を学んでいないという落差の指摘がありましたが、それも風化とつながっている。

中西　吉田裕さんが「日本人の戦争観」（世界）で指摘していますが、戦後世代の意識は高度成長を抜きにしては語れませんね。佐伯彰一さんが「歴史を裁けるか　朝鮮戦争の教訓」（正論）で書いているように、朝鮮戦争は日本人の戦争観の特殊な性格、問題点を白日の下にさらしています。

橋爪　佐伯さんが言うようにアジアの戦争について総体を見直す時期に来ていると思います。これまでの戦争の語り方は軍部が悪いとか侵略戦争だったとかいうワンパターンで、事実に直面する勇気がなかった。南京大虐殺でっちあげ説に流れがちな保守派の側も同じです。日本国民は積極的に戦争に協力し推進した加害者だったのですが、それを自分のこととして語る迫力が平和運動には欠けていた。

森　「週刊金曜日」（8／5）が特集「日本の加害責任の風景」で南京大虐殺などを取り上げています。ただ、これを若い人が読んで深く考えるかは難しい。生活と落差がありすぎる。

森　まゆみさん

中西　私の教えている学生が、国には終身刑というのはありうるのかという疑問を言っていました。自分の親も戦争にかかわっていない世代です。すべてを直視すべきだという考えだけでなく、暴虐をナマで示すことによって逆効果も生じうるという人間性を深く考えた視点も必要です。

橋爪　歴史とはストーリー（語り）ですが、事実の羅列だと恐怖心をあおるだけになる。それを意味づけないと、歴史にならないし教育もできない。今一番困るのは、若い人が韓国や中国や東南アジアの人と接触した時です。向こうの人は常識として知っていて、あえて言わないけれど日本との過去は知っているのが当然という態度で出てくる。日本の若者は知らないか、知っていても対応ができない。

中西　現代史教育がなされない背景には、歴史観の対立があるために大学入試問題で避けられていたことも大きかったと思います。大学の出題教官同士で大論争になるわけですから。

森　本田靖春さんが『自衛隊合憲』（現代）で、現に社会党よお前もか」（現代）で、現にある自衛隊をなかったように、すぐなくせるように幻想を振りまくのではなくて、自衛のための戦力の保持を認める一方で海外派兵は認めないように憲法改正をしたらどうか、と言っておられます。賛成はしませんが、そういう論議がもっとあってもいいと思います。

中西　輝政さん

中西　ただ、戦争経験が非常に宗教的で深い理念的な意味を持って、非武装中立論と結び付いたところがあるので、その宗教性をどう担保するかが問題ですね。さらに、非武装中立主義を支えてきた「今はいいけれどもこのままずるずる行くとどうなるかわからないから、とりあえず現状に反対し否認する」という姿勢を乗り越えることも必要です。自衛隊を合憲だと言っていた人も含めての課題だと思います。

橋爪大三郎さん

森　中村隆英さんと樺山紘一さんの「戦後日本は何を失ったか」（現代）で、中村さんが戦前と戦後を大きく区切るのは四五年ではなくて五五年だと言っていたのは面白かった。平和という一つのシンボルとパラレルなものとして高度成長があったと思います。

中西　私は戦後日本の高度成長はナショナリズムの代替物ではなかったかと思うのです。中野収さんの「『成熟した消費者』になった戦後日本人」（エコノミスト8／16・23）を読んでそんな印象を持ちました。行き着いた先が、戦争やナショナリズム、民族、政治におけるパワーや権力などの問題を全部避ける世代です。

橋爪　自分のことを自分で管理できない、消費生活を享受しているけれど、その条件を自分で作りだしたわけではない。その条件とは日本国憲法やそれを支えている日米安保条約であるわけですが、今の日本に課せられているのは、そういう「成熟した消費者」が、世界情勢を見据えた上で、もう一回国家意思を形成して、きちんと政治的決断ができるようになることだと思います。

森　井出孫六さんが「憲法の『名答』はどこへ行ってしまったか」（エコノミスト8／16・23）で言っておられましたが、「冷戦は終わったから」というような形であっさりと理念を投げ捨てることが横行している気がします。

中西　理念的なものを軽いノリでポンポン投げ捨てていくというのは、自分も含めた人間を軽くみているということですね。そう簡単に投げ捨てられるものではないはずです。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）

自由帳

アジアの「厳しい夏」

夏休みを利用し、私は今、アジア五カ国訪問の調査旅行に出かけている。韓国を皮切りに、中国、ベトナム、タイ、シンガポールと回る予定だが、韓国の夏も日本同様、例年にない暑さであった。もうタガの五時をまわっているのに、ソウルの「景福宮」の庭は照りつける日ざしがことのほか厳しい。しかし厳しいのはこの八月の日ざしだけではなかった。過去にも何度か訪れたことのあるこの李氏朝鮮時代の由緒ある王宮は年々、整備・改修が進み美しくなっている。外国人観光客も増え、最近はアジア諸国からの訪問客も目立つ。日曜で休んでいると、きれいな発音の中国語（北京語）で、ガイドが団体客に説明を聞くともなしに聞いていると、「日本」、「日本」とくり返し出てくる。御存じの方も多いと思うが、韓国の歴史上、最も由緒あるこの王宮の入り口にあたる正門と、日本で言えば紫宸殿あるいは清涼殿にあたる主要な宮殿との間に、戦前日本が建てた欧風の石造建築物が割り込む格好でそびえている。よく言われる通り、韓国の歴史を物理的に踏みにじろうとした日本統治のあり方を示す「動かぬ証拠」となっている。私はこれを見るたびに心の痛む思いをしてきたが、今、中国人観光客に、この旧日本総督府を指さし「あの建物の先端が垂直にそびえているのは、町のどこから見ても朝鮮式の宮殿のいらかがもつ独特の曲線をぶち壊しにするためだった」という説明が中国語で行われている光景には、照りつける日ざしよりもはるかに「厳しい八月」を感じさせられた。今、アジアは画期的な経済成長の波にのって、人々が行き交い新しいアジアの一体性が生まれようとしている。その中で「新しいアジア人の世界像」が形作られつつある。北朝鮮の核問題について話を聞いて回っても「日本人が北の核をとくに恐れていることを恐れる」という韓国の専門家の言葉にも、決して消え去ることのない「厳しい八月」を改めて感じさせられた。

（中西　輝政）

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（付記した以外の月刊誌はすべて9月号）

森	❶金日成の死んだ日 ❷元「革新論者」たちの危うい状況追随主義	柳美里　文藝春秋（巻頭エッセー） 高島通敏　エコノミスト8／16・23	❶北朝鮮関係の記事の中では珍しく言葉が響いてくる ❷激動の中で大勢順応でなく立ち止まり考えることの意味
橋爪	❶「やさしい政治」の虚構 ❷豹変する政治プラン	江藤淳　文藝春秋 吉本隆明　サンサーラ	❶村山政権は自社の黙契と親和力（なあなあ）が露呈した内閣❷小沢一郎は、国民に理解できる政治家のイメージを大切にしろ
中西	❶価格「大競争時代」の幕開き ❷大東亜戦争とは何だったのか	小島朗　中央公論 西義之、福田和也　諸君！	❶今起こっている経済の構造変化は、世界史的なスケールのものだと感じさせる ❷世代変化が不可避的に歴史観の変遷をもたらすのだ

◆ 読む・ガイド ◆

日本人の戦争観	吉田裕　世界	政府の態度や世論の変化は歴史認識に根ざしたものか
特集　現代の戦争	猪瀬直樹他　広告批評8月号	歴史感覚がなければ情報はただの断片にすぎない
「成熟した消費者」になった戦後日本人	中野収　エコノミスト　8／16・23	団塊世代が手をつけた快楽主義への価値転換の行き先
「分断国家」日本の五十年	山崎正和、粕谷一希　THIS IS読売	政治的、思想的分断状況が皮肉にも高度成長を産んだ
新興宗教国家・北朝鮮	関川夏央　諸君！	宗教教団である以上、あらゆる政治的論争は無意味だ
中朝関係　「特殊」から「普通」へ進めるか	朱建栄　世界	中国は北朝鮮をどう着地させようとしているのか
二大政党対立が始まった	北岡伸一　中央公論	政権担当能力を持つ集団が二つできたことは評価する
自社連立政権は長続きする	曽根泰教　諸君！	政党のボーダーレス時代は今はじまったばかりだ
「連立政権」の座標軸とは何か	佐々木毅、樺島郁夫　潮	五五年体制は全体ではなく部分でしかなくなった
リカちゃん国家のタヌキ首相	佐藤健志　サンサーラ	政権誕生を支えた日本人のアイデンティティーの混乱
「国家」なき配分政治の危うさ	佐藤誠三郎　THIS IS読売	対外依存主義、リーダーシップ拒否の克服が必要だ
あの夜　私の家で起こったこと	河野義行　文藝春秋	松本彩ガス事件。渦中の会社員の「独占手記」
村上春樹と吉本ばなな	大塚英志　Voice	＜おたく＞だけがあっさりと汎世界性を手にした皮肉
エイズ患者平田豊さんは楽しかったと言って死んだ	吉岡忍　婦人公論	なぜ私は平田さんのひつぎを積んで「逃走」したか
特集　エイズ・アクティヴィズム	大石敏寛他　インパクション　87号	エイズを生き、エイズを取り巻く社会を変えていく

雑誌を読む　9月

国連への協力、日本の立場

中西輝政さん　安保理常任理事国入りの論議は、ねじれた構造になっています。積極派と消極派、それぞれに違った意見が混在している。積極派の中には、日本の発言権を増そうという大国志向と、国際主義的、理想主義的な国連中心主義という、異質な議論が混在している。消極派の中にも、護憲派的な消極論と、憲法改正を視野に入れた上で手順として逆だという消極論がある。つまり、このまま常任理事国入りしたのでは改憲の必要が意識されなくなってしまうという考えです。

橋爪大三郎さん「外交フォーラム」の対談「日本の常任理事国入りをどう考えるか」で波多野敬雄前国連大使が開口一番、常任理事国に入らないと情報もとれないし、自国の利益も守れない、国益を追求するために常任理事国に入りたいと述べている。本音なのでしょうが、これでは外務省の省益的発想を一歩も出ていない。しかし、常任理事国入りは、省益や国益を考える以上に、世界秩序をどう形成するかという地球規模の話のはずで、省益の発想で勝手に国連で演説したり、雰囲気作りをしたりしてもらっては困る。

森まゆみさん　私もそう思いました。これまでの論議では国民にはとうてい判断しかねます。

中西　波多野さんの議論は、まさに国連の場で空気を吸った人の発想で、省益的な一面もあるかもしれませんが、国連の実態がまさにそうなんです。対談相手の諸井虔さんの国連理想主義的な傾向の議論と微妙なずれがあって興味深かったのですが、私はこのずれに本質的な問題がある気がします。国連よりも国益を優先するというのが世界の現実ですから、国連理想主義だけで発想するアプローチは間違いです。国連の現実、国際社会の現実、そして日本の理想というもののつながり方の認識が日本では未熟です。

森　「外交フォーラム」は外務省のPR誌ですから記事には一つの立場が出ていると思いますが、国連の実態をきちんと書いている記事がほかには少ないので、情報を知る意味では役にたったところがありました。

橋爪　国連は主権国家のかけひきの場なのですが、日本には国連幻想が根強くあって、国連が何でも解決してくれるという下駄を預ける考え方があふれています。そういう幻想を一度洗い出さないといけない。

中西　常任理事国問題にはナショナリズムが絡むということが論じられてないですね。拒否権の問題は特にそうです。「外交フォーラム」の「日本にかける期待」で米国国連協会会長のエドワード・ラックさんが日本の常任理事国入りを支援する議論をしながら拒否権を持つことには消極論を言っています。これは下手をすると日米関係に波及しかねない問題です。一方、同じ項目でシンガポール外務省局長のマーク・ホンさんは、日本がアジアの代表として常任理事国入りするのなら大賛成だが、大国的にアジアを牛耳るとか軍事大国になろうとするなら全く反対だと書いています。NATOや全欧安保のような地域機構の重要性が浮上している時ですから、アジアという地域

森　まゆみさん

における日本の国連貢献という発想が特に必要になっている。

橋爪　今は一つの曲がり角だと思うんです。日本がどれだけ国連に協力してやる気を出すのかが問われているわけで、それに無関心でいるのは正しい態度ではない。戦後の日本人は、世界情勢を左右する大問題の蚊帳の外に置かれていることに慣れていたわけです。ドイツの場合は社会民主党もそれなりのステップを踏み、国内世論も熟していると思いますが、日本ではそう

橋爪大三郎さん

中西　日本では途上国という視点もそうですが、日米関係という視点も欠落しています。国連による平和協力が日米関係の枠外だという考え方が、賛成反対を問わずにありますが、日米関係への目配りが少ない。

橋爪　そこはきちんと詰めなければいけないですね。質の違った日米の新しい協力関係を探していかなければならないし、その場所として国連を位置付けるべきだ。第三世界の食糧問題や人口、環境問題などさまざまな紛争の

中西　輝政さん

タネを事前に解決していくことが本当の安全保障であり、軍事はその一部にすぎないという総合安全保障の考え方がありますが、日本としては総合安全保障のために日米でどういう協力と分担ができるのかをきちんと相談すべきです。

森　水島朝穂さんが「軍縮問題資料」9月号の「平和憲法と自衛隊の将来」で平和的な行動のための提案をしていますね。NGOや国家民族単位だけでものごとを判断しないでオルタナティブの動きにも注目すべきだろうとか、民生専門家組織を作るというオーストリアの外相の話が論じられていて、わかりやすくて面白かった。

橋爪　佐々淳行さんの「宰相と軍政学」（中央公論）は、軍隊を国家機関として政治や国民がどう使いこなすかについての教養を政治家、市民が持たなければいけないという指摘をしていますが、説得力があると思いました。

中西　「エコノミスト」9／13の森本敏さんの「日本の向を守る防衛力」もふれていますが、軍事、防衛の問題は、脅威への対処、危機管理というだけでは狭すぎる。国家と軍隊、シビリアンコントロール、社会は軍隊をどう遇すべきか、軍事にかかわるさまざまな価値判断や理念をどうするか、それらの論議なしに軍政学だけに話が行くと技術論に終わってしまう。例えば靖国神社なしには旧日本軍はありえなかったわけだし、ドイツ軍の場合は反ナチ、非ナチ化が大前提になっていて、それをはずれたドイツ軍は存在できない。そういう軍隊の理念、歴史的な価値観の問題を考える必要がある。

森　「SPA!」9／14の「自衛隊員というお仕事」は面白かったですね。結構倍率が高いとか。職場恋愛とか、感覚的にはサラリーマンみたいで。

中西　自衛隊も四十歳になるわけですが、旧軍経験者はいなくなり、いわば市民軍になりうる客観的、人間的な雰囲気ができていると思います。自衛隊としての新しいアイデンティティーを持つ大事な時期にきているのではないでしょうか。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）

自由帳

早わかり、小沢一郎

台風一過のようなさわやかさ。憑き物がおちたのだろうか。竹下派を長年担当し、小沢一郎に「バッジを外してこい」と信任厚かった時事通信政治部デスクが八十冊の情報メモから公開。「親衛隊」だけが知る実像である（田崎史郎「小沢一郎との決別」文藝春秋）。

その一、「記者に会うな、君が一言言うたびに決着が長びく」と渡部恒三に。マスコミを操作するのは実は上手。その二、「竹下さんには城がない」盟友もいざとなれば切るドライさを持つ。その三、「梶さんがどうして龍ちゃんと……」疑念を抱いたとき、なぜか本人に話さない。黙って切る。

その四、かと思うと「あれは信用してるから大丈夫」と影で擁護する。この非情と有情の強いコントラストは他の政治家にない。

その五、「海部は本当に馬鹿だな」。敵と味方の仲間の人々はリアリスティックに利用。「担ぐミコシは軽くてパーがいい」

その六、「中曽根は舅になって力を残したい」政治家の権力欲の本質を読み、作戦をたてるのがうまい。

その七、影で煽倒しても、面と向かうと素振りにもみせず、とくに目上には礼儀正しい。その八、「いったん動き出したら引かない」徹底的に攻めまくり、「改北」は評価の基準を変えて「勝利」に。その九、「変わるんなら『田辺総理』だっていい」自分の考えが通るなら党派の垣根にはこだわらない。その十、「おれはいつだって辞める」自らの進退をかけているように思わせるのが上手。しかし「自分を辞めさせられないと思っている奴が辞めると言う」（田中角栄）のだ。

「総理になってみろ、なにもできないよ」という小沢一郎の真方極力にはかげりがみえると田崎氏はいう。たしかに、こんなヤクザの出入りみたいな言葉のとびかう政治にはうんざりだ。「国民の知る権利」を代表する記者として危険覚悟で発表した田崎氏を支持したい。「自分が切られたから」「評論家になるつもり」などの傍目八目はこのさい無視。他の記者さんも取材メモは捨てないでね。

（森まゆみ）

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（付記以外の月刊誌はすべて10月号）

森	❶特集「断筆宣言」から一年 ❷井上光晴はジュリアン・ソレルだね	篠田博之、みなみあめん坊他　創 原一男・関川夏央　宝石	❶こうなったらしつこくやってほしい。日録付き ❷「全身小説家」を見て、これを読んでみると楽しめる。こわいのは原一男？
橋爪	❶政治の原点を曖昧にするな・総合戦略大綱 ❷特集：女子大生136人の就職〝不条理〟物語	中曽根康弘　中央公論 江原由美子他　宝島30	❶小選挙区制には独裁の危険性。総合戦略にそった諸改革を進めよ ❷不況と女性差別のダブルパンチ、めげるな女子大生
中西	❶日本のアジア工場は対欧米輸出基地ではない❷東アジアに広がる日本のポピュラー文化	山本哲三 エコノミスト9／6 本田史朗　外交フォーラム9月号	❶とうとうと変化する日本とアジアの関係は昨日までの常識を瞬く間に打ち砕く ❷21世紀の日本とアジアのイメージを予感させる

◆ 読む・ガイド ◆

対談・日本の常任理事国入りをどう考えるか	諸井虔他　外交フォーラム9月号	国連の実態が知られないまま議論がなされていないか
宰相と軍政学	佐々淳行　中央公論	村山首相は宰相としての軍政学をしっかり学ぶべきだ
平和憲法と自衛隊の将来	水島朝穂　軍縮問題資料9月号	自衛隊転換へ大規模な常設国際救助隊の設立が必要だ
自衛隊員というお仕事	SPA！9／14	仕事として人気の出てきた自衛隊を新しい尺度で見る
なぜアメリカは「小沢一郎」を警戒するのか	手嶋龍一　フォーサイトNo9	小沢氏は日米から国連に軸足を移そうとしているのか
税制改革答申への7つの疑問	野口悠紀雄　季刊アステイオン秋号	消費税率引き上げは論拠不十分。税制改革の再検討を
「日本なんかいらない！」韓国の新しい〝恨〟	田麗玉他　SAPIO 9／22	なぜ今「反日」の本が売れ、親日派が糾弾されるのか
テーマエッセイ・夫婦別姓について	石川英輔他　Voice	夫婦同姓は明治中期に西洋式を取り入れた制度だ
「夫婦リストラ」が始まる	山田昌弘　諸君！	感情表現の自由化で「もてない人」に厳しい社会に
「大競争」の時代	堺屋太一　現代	「世界大競争の時代」日本は選択を誤ってはいけない
民主主義の道徳的危機	C・メイヤー　中央公論	政治からの逃避、論争への不信。危機にどう対処する
特集　テレビ報道改革論	青木貞伸、新井直之他　世界	椿発言問題再検討、放送にとって真の公正・公平とは
ピューリッツアー賞　カメラマン——死の真実	矢高則夫　文藝春秋	「少女とハゲワシ」の写真家の遺書にあったものは
「ウイルス保守主義」宣言	佐藤健志　発言者	「人生＝病」である。病気や死に肯定的な意義を見よ
われら昆虫の多様性に魅せられる	養老孟司他　現代思想9月号	日本の虫好きはすごい。世界一のクワガタ図鑑も出た

雑誌を読む

10月

美とダイエットの背景

森まゆみさん　今月は美しくなりたい、やせたいというテーマですが、最近の女性誌は昔に比べて、この種の記事が圧倒的に増えている気がします。女性週刊誌になると広告もそういうものばかりです。痩身具、ダイエットの薬や食品、下着やサウナスーツとか。昔、吉永小百合さんがアイドルだったころはプクプクしていたし、山口百恵さんはふっくらした二の腕をしていたんですが、最近のアイドルは細くて骨と皮みたいです。女性誌にはやせなくてはいけないという強迫的な空気がまんえんしているようです。

中西輝政さん　ダイエットの記事が多いのは、若い女性の痩身願望とともに中年男性の成人病コンプレックスのせいもありますね。

橋爪大三郎さん　私は最近まで五年間くらい女性誌にコラムを書いていたんですが、女性誌の世界は閉そくしているなという印象を持ちました。何を買おう、何を食べよう、どこへ行こうなど、ほとんど自分に対する関心でできている。体に関するものも、きれいになるという自己満足に集中している。もう一つの感想は、非合理的だなあということです。必ずあるのが占い、血液型で、やせる話も医学的な基礎とはズレたところで、あらゆる方法の実例が列挙されている。

中西　婦人公論の「ダイエット族の勝利宣言！」は、キャシー中島さん、安藤和津さん、梨元勝さんの三人の年齢が私と近いし関心を持って読みました。三人とも結論は、無理をして大きなプレッシャーをかけるのではなく、生きている流れとぶつかりあわないやせ方を、ということで、人生観がにじみでていました。他のグラビア雑誌の情報は、プラクティカルで、究極のハウツー的で、人生哲学はあまり感じられない。今はやりの「知の技法」（東大出版会）と共通するところがある。

森　恋人や異性に美しく見られたいという目的があるのが従来の記事ですが、フラウ10月25日号の特集「『からだ美人』になる！」では、男のために美しくなるのではなくて「私らしさ」の追求や、精神の安定など関心が自分に集中しています。二十五歳以上くらいが対象のようですが。

橋爪　女性誌のテーマは美なんです。美をテーマにしなかったら女性誌でなくなってしまう。美が女性のアイデンティティーでないといけないというのが、女性誌のイデオロギーなのです。しかも美は多様でないといけない。美の要素を細分化し、顔だけでなくスタイルとか髪とか手とか足とかのパートに分けて、鍛錬や手入れの対象にする。なぜそういう風に美が多様化するかというと、それはもちろん多様な商品アイテムと対応している。化粧品、アクセサリー、アンダーウエア、アウターウエア。読者はわかっていながらも、半ばだまされつつその物語に入って行く。

森　ヒラリー・クリントンなんかはどんどん変わってますね。お金があれば美容や整形と、新しい自分に到達可能になった時代なんだと思います。

森　まゆみさん

中西　マフィンの「あっち行ってよ！『ゼイ肉』」とかターザン（10／26）の特集「モンダイは男の尻、女のヒップ」などは、筋肉や骨格の図が出ていて専門的ですが、医学的合理性まではいかない。

森　タレントがよく登場します。女性セブン10月27日号をちょっと見ても「ちょっぴりやせた百恵ママ」「幸せぶとり」など、やせるか太るかが大変な関心事になっている。「海老名美

橋爪大三郎さん

中西　ジョギングを極限までやったり、ダイエットで体をいじめたり、極端に走るところがありますが、こういう流れがどこまで行って止まるのか、心配です。政治経済の論評でも政策志向的、専門的なプラクティカルな流れが優勢ですが、これは女性誌のダイエット記事だけではない日本社会全体をおおう傾向です。

橋爪　女性誌を支配している体への関心は、精神的な価値や倫理、道徳などを拒否している。文化に対する不信の現れではないかと思います。

中西　輝政さん

森　「主婦の友」とか一時代前の女性雑誌にはもう少し規範、ノルムについての論議があったと思いますが、駆逐されてしまいましたね。

橋爪　「『戦後民主主義』と『松田聖子』」（諸君！）という対談があります。聖子さんはエステのいろんなアイテムの達人で、女性雑誌的なノリでスーパーレディーになった人だと思います。対談で上野千鶴子さんは、専業主婦になった山口百恵さんと比べて、結婚後も相変わらず自由に恋愛している聖子さん的な生き方の方が女性を勇気づけたし、一歩前進であると言っているんですが、あまり賛成できません。

森　私も、最近の松田聖子評価論にはくみしたくないんです。世界の「『チマ・チョゴリ切り裂き事件』を追う」では、在日朝鮮人の女の子が、自分たちは学校でも社会や政治の話をするのに、日本の女の子はアイドルのことばっかり話をしていて、話し合いのしようがないって言っていました。

橋爪　留学生たちが、日本の若い男女に対して同じような見方をしています。国によっては徴兵制があったり、政治的な厳しい対立があったりして、それなりに考えるべきことを考えてきているのに、日本の人たちは現実生活でもメディアでも考えるチャンスがない。特に女性がこういうものばかり読んでいて、その代表が松田聖子さんなのだとしたら、そんな方向に元気になってもしようがないと思います。

森　最近は危険なダイエットについて警告をした本も出ていて、どの本の結論もそうですが、それぞれ自分らしい体形であれば、いいじゃないか。画一的ではなくて。

中西　時代遅れであることを個性のプライドの柱にできるのがある種の文明の成熟度だということを、イギリスのある評論家が書いていました。時代遅れを恥じるアメリカと、それを追う日本は、まだまだ後に残せるものを生み出せていないと思います。

▽もり・まゆみ　地域誌編集者
▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）
▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）

自由帳

フェミニズムは勝利したのか

上野千鶴子×大塚英志さんの対談『戦後民主主義』と『松田聖子』」（『諸君！』）は、最近フェミニズムのパワーが落ちたのか（大塚）、それとも広く受容されたのか（上野）をめぐって、すれ違っているところが興味深かった。

威勢のいいフェミニズムの文章に、最近たしかにお目にかからなくなった。いっぽう雑誌メディアには、ファッションやダイエットといった「自己への配慮」をテーマにする言説が、ますますあふれている。これはもしかすると、女性の身体がもう男性の手を離れ、女性自身によって（自己）消費され始めるほど、市場が成熟したということかもしれない。

言い方をかえれば、女性はわがままになった。そして、わがままはいいことだと、上野さんならたぶん言う。これは女性が男性に対して力をつけ、昔より自由になった証拠だ。情勢は有利に展開している。大多数の女性が自己主張を強めつつあるのだから、これがフェミニズムの勝利でなくて何だろう。

だが待てよ、という声も聞こえる。女性の実力はたしかに向上した。が、それはフェミニズムの思想ががんばったおかげだろうか。時代の歯車が回っただけではないか。――そう考えるせいか、若い世代の女性には思いのほかフェミニズムに冷淡な人が多い。

フェミニズムなんて知らないよと言えるほど女性が元気なのは結構だが、女性誌をみるかぎり、やっぱり女性は美しくないといけないらしい。これは、かなりの不自由だろう。不況の中、就職の女性差別も深刻だ。女性がちょっとわがままになったぐらいで、世の中の構造は変わらない。そういう当たり前の現実を、がっちり受けとめる、まともな思想はないのだろうか。普通の女性がものを考えるフレームになる思想。それを生み出せていないのはみんなの責任だが、フェミニズムも決して胸を張れないはずだ。大塚さんの素朴な疑問ももっともだ、と私は思った。

（橋爪大三郎）

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（記載のない月刊誌はすべて11月号）

森	❶「チマ・チョゴリ切り裂き事件」を追う ❷日本仏教十三宗――ここが違う	下嶋哲朗　世界 大法輪	❶とんでもないことが日常的に起こりうることを示した説得的なルポ❷仏教という身近だがわかりにくい世界を簡明に整理して便利
橋爪	❶中国に「叩頭」した日本外交 ❷国連常任理事国としての矜持とは何か	入江隆則　Voice 西部邁　発言者	❶日本政府は台湾問題や日中条約をよく勉強せよ❷憲法九条は国連軍事活動を禁じていない。平和主義的感情論の手前勝手を脱せよ。
中西	❶日本は本当に変わるのか ❷アメリカニズム批判の視角	マイケル・モチヅキ　中央公論 榊原英資・井尻千男・佐伯啓思・西部邁　発言者	❶変化するアメリカの日本への視角をよくとらえて❷変化する出色のレビューとして日本のアメリカへの視角と歴史の位相を示す

◆ 読む・ガイド ◆

ダイエット族の勝利宣言！	キャシー中島、梨元勝他　婦人公論	決してあきらめず、ゆっくりやることが成功への道
北朝鮮からの亡命者50人の証言	AERA　10／17	過去10年間の亡命者の半数に閉鎖国家の素顔を聞いた
世界新秩序からの脱落	野田宣雄　文藝春秋	アジア主義、日本主義への回帰は危険な米国離れの道
中国に〝挑戦〟した米国の思惑	宇佐美滋　世界週報10／25	米国は大きな経済力を持つ台湾との関係の強化を図る
よみがえる獅子―中国	伊藤憲一　文藝春秋	鄧小平の革命が成功し中国は21世紀初頭に超大国に
変貌する政治文化―統一ドイツの知的風景	三島憲一　世界	リベラル左派が守勢に回る統一ドイツの知的風景
あえて問う現代の君主論	佐々木毅　THIS IS 読売	「愛されること」に専念する政権はやがて自滅する
アメリカ対日洗脳工作の全貌	Views	米機密文書に記された秘密資金による映画政策の実態
日本ジャーナリズムの構造転換	香内三郎　季刊窓21	メディアは単純で魅力のない物語しか示せなくなった
政治ジャーナリズムに未来はあるか	立花隆、田勢康弘　文藝春秋	「現役政治部デスク極秘メモ」公開の意義を問い直す
「高松宮日記」について	阿川弘之　中央公論	発見された一級史料の刊行準備はいかに進められたか
アメリカ10代の性　ぼくらの「純潔」宣言	Newsweek日本版　10／26	アメリカの10代、今や「純潔」がトレンドになった
「ヘアヌード」シンドローム	荒木経惟他　広告批評10月号	ヘアヌード、写真家と撮られる女はどう見ているか
現代雑誌名鑑　不完全版	思想の科学	ミニコミ、個人誌を重点に70年以降の雑誌を一挙紹介
イチローの父　初めて明かす親バカ子育て術	鈴木宣之　宝石	10年間、午後3時半過ぎは息子の野球ばかりだった

1994-2-11/18

雑誌を読む　11月

「改憲試案」の意味と批判

橋爪大三郎さん　読売新聞が十一月三日に「憲法改正試案」を掲載しましたが、これをさまざまな雑誌が取り上げています。これまで憲法改正の具体的提言は少なかったのですが、発行部数一千万部を超える新聞社が具体的提言をしたことは注目すべき出来事です。

森まゆみさん　憲法について論議することは大事だと思いますが、今出された背景に興味を持ちます。私は雑誌や新聞は読者と一緒に歩むものだと思うので、読者や働いている社員との論議を尽くさずに、一部の学者や社員の研究会でやるという方法は疑問です。「世界」の「『改憲派のフィクサー』渡辺恒雄氏の思想と行動」（浅川憲一郎氏）でも指摘していますが。

中西輝政さん　ほぼ同時期に英国の「エコノミスト」（10／22）が、英国王制廃止論を展開しています。こういう有力誌が真正面から王制廃止論を唱えたことに驚きました。英国の誇りだった不文憲法ではなくて成文憲法を制定し、上院と貴族制度を廃止するという数百年ぶりの国家構造大リストラ提案です。冷戦が終わって生じた世界的な改革熱に通じると思いますが、一方の読売試案を見て思ったのは、むしろあんまり変わっていないな、という印象でした。安全保障についても現にある自衛隊をあると言っているだけで、世論に対する問題提起の迫力はない。

森　「週刊新潮」などは改憲の立場からもの足りないと批判してますね。

橋爪　読売新聞社がたたき台を出したこと自体は大変結構なのですが、それにしては大変生ぬるい。「世界」のほかにも「創」の「『読売新聞憲法改正試案』に書かれざる非民主性」（丸山昇氏）、「現代」の「読売新聞『一千万部』の内幕」（溝口敦氏）など裏読みの記事が出ています。大方の裏読みが一致しているのは、読売新聞は朝日新聞を部数で上回ったけれどもクオリティーペーパーとしての評価が低いので、対抗上、こういうものを出したのではないか、ということです。そこに政局の動きも絡まって渡辺恒雄社長が世論を強引に誘導しようとしているのではないか、という観測が、試案に対する反発の底流になっています。

中西　英国のように、憲法とはなんなのか、と考える作業が必要です。日本人には憲法観についてのコンセンサスはあるんだろうか。何条がどうという問題ではなくて、またまた突然「空から降ってきた憲法」とならないためにも、そこから議論を始めることが先決で、先に条文の改正が提起されることは順序が逆でしょう。

橋爪　「週刊現代」（11／19）の談話で横田耕一さんは試案に落第点をつけています。憲法の根本的な性格を誤解している、と。憲法とは、主権者である国民が国家に対して、その行動をコントロールするために突きつけた要求条項であるはずなのに、試案では随所に、国民に向かってこうしなさいと説教しているのはおかしい、というのですが、私もそう思います。

森　試案は前文からおかしいですね。「最高法規であり、国民はこれを遵守しなければならない」とか。私は現憲法の前文が好きなんです。国民が決意し行動していくという考えが現憲法にはあるんですが試案にはない。田原総一朗さんが「サンデー毎日」（11／20）の「『憲法改正試案』を糾す」で「全体が事務的」な文章だと書いていましたが、何の理想もない気がする。

中西　ロマンが感じられない、審議会の報告文のようです。

橋爪　安全保障については「世界」が「共同提言　アジア・太平洋地域安保を構想する」で読売試案と正反対の考え方を表明しています。この提言は冷戦が終わって憲法が本来想定していた平和的な世界秩序が実現する可能性ができたのだから、自衛隊を縮小していこう、という内容です。

中西　読売試案の認識はいわば「世界新秩序イメージ」で、国連を中心とするアジアの集団安保体制を作れと言っていますが、日米同盟を断ち切るのは危険ではないでしょうか。

中西　私は日本国憲法は日米安保とワンセットの形でのみ成立しうるもので、どちらかが欠ければ成り立たないものだと思っています。逆に言うと、改正試案で自衛隊を認知するだけでも、日米安保体制、日米同盟の存在価値は理念的に大きく減退する。また、日米安保体制を廃棄していこうとしたら現行憲法ではやっていけないことが必ず起きてくる。「世界」の論文も読売試案も、こういう点に十分配慮が払われていないのではないでしょうか。

左から中西輝政氏、橋爪大三郎氏、森まゆみ氏

森　「世界」は日米安保も自衛隊も冷戦・戦時を前提にしたもので見直しが必要だといっています。自衛隊を違憲でない「最小限防御力」に変える方法はわかりやすいと思いました。

橋爪　試案は「自衛のための組織」と奥歯にものの挟まった言い方ですが、なぜ「自衛軍」とはっきり言わないのでしょうか。

中西　憲法は国家とは何かという哲学、理念を表出しなければならない。つまり、ある程度明確な国家観なしに「軍隊」の創出はできない。国際貢献というコンセプトだけでは無理なのです。軍隊をもつ上で最も大事なのは「民主主義」だと思います。改正する必要があるとすれば、現行憲法の民主主義が時代に合わなくなっているという点で、国民投票など直接民主主義を加味した民主主義の衣替えを柱に据えてほしい。

橋爪　私は国民投票には少し疑問がありますが、民主主義の強化を改正の柱にすることは大賛成です。試案では地方分権強化の考えも弱い。

森　選挙のときだけの民主主義ではなくて、もう少しわくわくと政治に関心をもてないと、政治への無関心は果てしなく進むのではないでしょうか。身近な地方自治への参加も大切ですが、一度国民投票をやってみたい。

橋爪　読売試案については、密室で決めたからけしからんというような批判はやめてほしい。自分はこういう憲法の方がいいというプランを各人が掲げて、そのよしあしをめぐる議論に早くなってほしいと思います。

▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽もり・まゆみ　地域誌編集者▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）

自由帳

英国の「王制廃止論」

先日、英国王室をめぐる問題について話をし始めたら、「大学の先生でも、あんな問題に関心があるのですか」と言われた。無論、チャールズ皇太子夫妻の「不倫」スキャンダルについては以前から知っていたが、実際のところ、「ああ、また騒いでいるな」ぐらいにしか関心はなかったのである。

英国王室のこの手のスキャンダルは昔から枚挙に暇がなく、一八二〇年代のキャロライン妃事件、晩年のヴィクトリア女王に「情夫」がいたといううわさや、その息子エドワード七世の「男色疑惑」、さらには一九三〇年代の「王冠を賭けた恋」のシンプソン夫人事件など、誠に「人間らしい」エピソードがバッキンガム宮殿の歴史を彩ってきた。

しかし今回に限っては少々事情が違うのである。とくにこの二カ月に起こった皇太子夫妻のきわめつきの暴露合戦もあってか、ロンドン『エコノミスト』や他の高級オピニオン紙が、ついに公然と「王制廃止論」を唱え出したからである。イギリス世論の根幹を握るこれら保守系の硬派メディアの動きを見て、「これは大変なことになり始めた」と感じざるを得ない。というのは、「王制廃止」もさることながら、その背後には上院の廃止や小選挙区制から比例代表制への移行、国家と教会の関係の解消など、国の基本構造に関わる大改造の構想が横たわっているからである。イギリスの君主制は北欧や日本の場合と違い、政治体制と深く関わっており、王制の存在が「政治改革」の隠喩として意識されてきた背景がある。

しかし貴族制度の全廃やイングランドとスコットランドの国家分裂にも波及しかねない、まさに数百年ぶりの「国家改造計画」をすこぶるラディカルな形で有力マスコミが正面からためらわず提起する、そのダイナミックな精神的活力こそ、実は何にも増して貴重なイギリスの国家的伝統であるような気がする。この活力を失うなら、どんな制度や伝統も実は意味のないものなのであろう。

（中西　輝政）

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（月刊誌はすべて12月号）

森	❶准看問題　今こそ決着のとき ❷マスコミが作ったサリン事件	黒岩祐治 中央公論 江川紹子 諸君！	❶高齢化社会を支えるには今の差別的安上がりサービス待遇じゃだめ❷警察のリークを垂れ流すマスコミの人権感覚を問う
橋爪	❶大東亜戦争をデザインした男 ❷総力特集「朝鮮総聯の研究」	中川八洋 サンサーラ 宝島30	❶スパイ尾崎秀実の画策した日中戦争の目的は中国と日本の共産化だった❷総連組織の実際、チョゴリ事件の背景など盛りだくさん
中西	❶新アジア主義者たちの広島アジア大会 ❷政治哲学なき時代―大平正芳総理回想	李隆 中央公論 香山健一 諸君！	❶アジアにおける日本のあり方に「戦後」を超える視点を提起する❷55年体制が持っていた政治における「深い遠り」を教える

◆ 読む・ガイド ◆

特集・日本国憲法を考える時がきた	北岡伸一他 THIS IS 読売	読売憲法改正試案の全文と解説を完全収録
読売新聞「憲法改正試案」大論争	田久保忠衛、佐藤欣子他　文藝春秋	試案を出したのはいいが中身には哲学と主体性がない
「改憲派のフィクサー」渡辺恒雄氏の思想と行動	浅川憲一郎 世界	渡辺恒雄氏の政治活動について新聞は報道すべきだ
共同提言　アジア・太平洋地域安保を構想する	古関彰一他 世界	「平和基本法」提言グループによるアジアの平和構想
日米安保は空洞化する	日高義樹 Voice	沖縄米軍が撤退し米中軍事同盟への模索がはじまる
伏魔殿「国連」の正体	櫻見芳浩他 SAPIO11/24	国連はエゴ丸出しの組織なのに日本はナイーブすぎる
「地球民生大国」の視点からの議論を	高橋進 エコノミスト11/22	国際社会の文明化、民生化めざす「世界内政政治」論
市場の前に敗退する日本政治	竹内靖雄 THIS IS 読売	小さな政府・国際派は多数になりえず政治は失敗する
進歩主義からの訣別	榊原英資 発言者	技術革新、経済成長の神話を捨て環境破壊に対抗せよ
ああ定年、夫の在宅がストレス！	黒川順夫、清水博子他　婦人公論	覚悟ができている女とできていない男のすれちがい
世は〝結婚しない化〟に向かっている	大橋照枝 婦人公論	高学歴で男との賃金格差が少ないほど未婚率が高まる
結婚難と経済成長	山田昌弘 諸君！	どんな異性を好きになるかは経済変動によって決まる
特集　女子アナは素敵なショーバイ	放送文化	競争率千倍、女子アナは知的シンデレラ願望の果大成
総力特集　「言葉狩り」徹底追及	筒井康隆他 マルコポーロ	これからはマスコミの自主規制との戦いだ
死ぬための生き方―おいらが病床で考えたこと	ビートたけし 新潮45	悪い顔なりの仕事がある。精神異常の殺し屋役とか

雑誌を読む　12月

◆ 私のお勧め　2点 ◆

（付記した以外の月刊誌はすべて1月号）

森	❶敗戦後論 ❷原爆展と米国市民	加藤典洋　群像 中野嘉子　諸君！	❶「汚れた日の丸」＝敗者であり続けることを選ぶ大岡昇平の意味❷展示をめぐるさまざまな米国民の意見
橋爪	❶読売憲法試案の批判 ❷まぼろしのアジア経済	吉本隆明　サンサーラ ポール・クルーグマン　中央公論	❶すっきりした非戦・非武装の憲法九条は改正の必要なし❷アジア経済の急成長はかつてのソ連経済と同じで早晩頭打ちになる
中西	❶アジア・ルネッサンスと共生の思想 ❷「米朝合意」の笑えない話	黒川紀章　サンサーラ 武貞秀士　Voice	❶経済を超えたアジアの理念を模索する大作で（下）を待望したい❷緩やかに、しかも着実に変化するアジア情勢を手堅く論証する

◆ 読む・ガイド ◆

日本、この半世紀	ジョン・W・ダワー　世界	占領政策は日本の民主主義に大きな矛盾を残している
隠蔽された戦争	松本健一　諸君！	西田幾多郎の「世界新秩序の原理」が隠蔽された理由
あの戦争とは何だったのか	伊藤隆、佐藤誠三郎　中央公論	「あの戦争」を歴史的事実として評価できない理由は
中国ナショナリズムと国際共産主義	林健太郎　正論	小堀桂一郎氏との「侵略戦争」論争を総括する
特別対談　初心から逃れられずにきた	大江健三郎、安江良介　世界	戦後をともに歩んだ作家と編集者の「初心」とは
戦後50大事件の目撃者	文藝春秋	重大事件にかかわった目撃者たちが明かす
〝コンバージョン〟時代のアジア・太平洋	竹中平蔵　エコノミスト　12／27	軍拡は長期的には経済成長を阻害する要因となる
アメリカン・リベラリズムの崩壊	榊原英資　発言者	社会主義の崩壊と並行して理念としての破産が進む
「近代的リベラリズム」への疑問	佐伯啓思　アステイオン冬号	「制約なき個人の自由」と社会の安定は両立するか
二〇一〇年、アジア新秩序	中西輝政　諸君！	アジアときちんと向き合わぬ外交は将来につけを残す
二つのアジア主義	中島嶺雄　Voice	マハティール・モデルと李登輝モデルの落差は大きい
危険なアジア主義の台頭	野田宣雄　THIS IS 読売	日本人のアジア回帰とアメリカ離れは危険な傾向だ
日米同盟の再検討	北岡伸一他　外交フォーラム12月号	日米は今後どのような形で世界にコミットするのか
大連立政権で官僚主導を打ち破れ	山口二郎　Ronza 創刊準備号	官僚支配を崩すための「政党の自立」に何が必要か
現代のいじめは死に直結する	土屋守　婦人公論	「昔はいじめられて強くなった」という認識は甘い

戦後の出発点を問う

中西輝政さん

中西輝政さん　「戦後五十年」の特集がいくつか見られます。ジョン・ダワーさんの「日本、この半世紀」（世界）は、戦前と戦後の連続性と戦後の独自性の両面からの議論で、興味深い視点だと思います。この中で私が注目したのは、雑誌「世界」創刊号の発刊の辞にある平和や民主主義への非常に強い思い入れについての「ほとんど聖書もかくやの表現を用い」という形容です。神聖な価値観に対する非常に強いコミットメント、人間や人間が作る社会という、問題をはらんだ存在を超越しようとする、理想主義的な戦後の精神性をよくあらわしている。この「神々しい民主主義」という精神的契機が、「戦後」を論じる際の一つのとっかかりになると思います。

橋爪大三郎さん　「アメリカの占領政策が、民主主義の真の精神に逆らうような機構や慣行をさまざまな形で生き長らえさせたという視点から再検討されてしかるべき」との指摘が重要です。この事実認識は「神々しい民主主義」の観点から欠落する。占領統治の結果、実際には「帝室型、官僚型、規制型」民主主義という、民主主義と本来なじまない形容詞のつく多くの民主主義ができてしまった。ダワーさんは、この事実を戦後民主主義理解の出発点に置くべきだと言いますが、賛成です。

森まゆみさん　この文章で、戦後日本の指導者が福沢諭吉型の「脱亜」＝アメリカ一極集中をとり、知識人が岡倉天心型の「脱欧」＝反米に傾いたこと、また戦後民主主義が世襲による特権や家父長的な男子の優位など、差別を残したと指摘されている点は他にはないと思います。

伊藤隆さん、佐藤誠三郎さんの対談「あの戦争とは何だったのか」（中央公論）で、この前の戦争を何と呼ぶかが話されています。佐藤さんは「大東亜戦争」は虚偽にあふれた大義名分を前提にしているので使いたくないし「太平洋戦争」はアメリカ中心の考えだし、戦争の原因を探ると「十五年戦争」も不適当なので「あの戦争」という、と言っておられます。伊藤さんは「先の戦争」と言っている。松本健一さんも「隠蔽された戦争」（諸君！）で呼称にこだわっていますね。

中西　今、戦争を区別する議論があります。ソ連に対しては侵略戦争ではなかった。中国に対しては侵略戦争であり、朝鮮半島、台湾は謝罪すべき植民地支配だった。東南アジアは列強の植民地だったからグレーゾーンで、対米英戦争は正当な主権国家同士の戦争といった考え方です。しかし、このように戦争を分ける考え方は、「国際秩序」を守るという考え方とぶつかる契機がある。日本が国際秩序を犯したために、アメリカによって制裁されたという考え方が他方にある。この対峙は現在の世界秩序論とも関係している現代的な問題です。今日同様、「世界秩序」は不可分という国際的普遍主義に立つなら、第二次大戦を細分化し区別することはできないのです。

橋爪　伊藤・佐藤対談では先発産業国と後発産業国、後発国の中の日独伊対ソ連、中国と日本、アジアの植民地と植民地支配者という四つのレベルの異なった対立があることが話題になっています。それはそうなのですが、それぞれが違った戦争だとまでいうなら、間違いだと思います。一連の戦争の中心に日本がいた。近代化しつつある日本が国際社会への適応に失敗してつぎつぎ戦争を引き起こしたのですから、歴史的事実としても一つの出来事としてまとめるのが適当です。例えば「東アジア戦争」とか。

中西　日本が中国を侵略し日中戦争を始め、その経過の中でアメリカの欧州参戦と絡み合う形で真珠湾攻撃があった。このつながりを押さえずに戦争を分けるのは歴史の事実に反する。

加藤節さんの「戦後50年と知識人」（世界）を興味深く読みました。民主主義、平和主義は非常に明るく、国民的なコンセンサスを持って知的にも情緒的にも受け入れられた。それがもう過ぎ去った時代という喪失の感覚がノスタルジックににじみ出ています。その意味では「民主主義を守る」という姿勢の正統派の戦後派知識人の辞世の句のような論文で、民主主義をさらに発展させ前に進める方向はこの論文からは到底出てこない。

橋爪　加藤典洋さんの論文「敗戦後論」（群像）を読んで感銘しました。彼は戦後日本が、深い自己欺瞞に陥っていると見ます。武力の行使・威圧を認めない平和憲法が、連合軍の武力の威圧により「強制」されたという事実。この「ねじれ」を引き受けることが敗戦なのに、そこから目をそむけてきた。それが、戦後の日本社会を「人格的に二つに分裂」させたのだと。欧米二大政党が国論を二分してもそれは二つの異なる人格の対立ですが、保守／革新の対立は一つの人格の分裂（ジキルとハイド）だ。分裂しているから非現実的な「潔癖さ」を主張できる。それではだめで、むしろ悪から善を作るべきだ、と加藤さんは言う。戦後は出発から汚れていたと認める。侵略者である三百万の自国の死者を〝かばい〟、死者とともに侵略者の烙印を国際社会の中で受けることが一個の人格として侵略戦争の担い手たる責任を引き受けることになると言う。この苦渋に満ちた原点から出発しないとすべて空論になるという主張に、大いに賛成です。

橋爪大三郎さん

森まゆみさん

森　私もすごくいいなと思いました。民主主義はアメリカの原爆の力で強制的に押し付けられたもので、日本人はそれを選び直してはいないという自覚が欠けている。「戦争はごめんだ」だけで、侵略の謝罪も苦痛も実のところ引き受けていないと指摘しています。一方、戦後民主主義においては、個の独立というよりは「われわれ」と衆を頼む集団主義がありますが、加藤さんは美濃部達吉さんや中野重治さんのようなあえて大勢に逆らう屹立する個を強調している。

中西　信念体系へのコミットメントを大切にすることは大事なことだと思います。ただ、あまりに潔癖を求めると袋小路に入ってしまいます。あまりに高い倫理的水準を人間存在に要求すること、あらゆる関係を人格的なコミットメントと見なしてしまう考え方は、結局、より深い堕落をもたらす。また、この潔癖さが日本人の外交観や同盟の運用などにも悪い影響を及ぼしています。

橋爪　戦後民主主義は明確な信念体系ではなく、いくつかの踏み絵となるシンボルを持った集団帰属意識にすぎなかった。信念体系が変化する転向なら、新しい信念体系に着地できますが、集団帰属だから脱落にしかならず、残ったものこそ正しく純粋だということになる。戦後民主主義がそれ以上のものでなかったことが問題なのです。

▽なかにし・てるまさ　静岡県立大学教授（国際関係論）▽はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授（社会学）▽もり・まゆみ　地域誌編集者

自由帳

管理でなく深い洞察力を

座談会のあと「画一社会がいじめを招く」（マイケル・ハーシュ、高山秀子「ニューズウィーク」12／21）を読んだ。

「いじめは、体制順応の価値観を若者にたたきこむ残酷なメカニズムの一つだ。集団に溶けこめない弱者や変わり者は村八分にされる」という視点は、日本の雑誌にはあまりない。ここに添えられた写真はおそらく朝礼だろう。制服姿の生徒たちが一様に深々と頭を垂れる。私たちに見慣れた風景だが、英語版「ニューズウィーク」の読者には異様に映るだろう。まるで戦前の富城遥拝。

一方、日本の雑誌は「少年11人を直撃」（週刊現代12／24）したり、「呆れた中学の実態」（週刊読売12／25）を追求したり、原因は「教育から厳罰主義を排除したせい」（発言者）だとしてマスヒステリーに陥っている。これだから校長も保身のため、全校生徒を集め、まるでいじめっ子がチクルな、といっているような箝口令をひかざるをえず、実態はまた密室化するのだ。

いじめの原因は、「週刊文春」（12／16）で野坂昭如氏がいうように、学校の「まるで旧陸軍内務班」のような管理主義と無責任体制にあり、それと闘わなかった親たちにあると思う。

じっさい私の体験でも、学校では給食のパン、牛乳、おかずの三角食べの奨励、一の声、二の声、三の声といった声量の管理、賛成はグーで、付け加えの意見はチョキといった手の上げ方の決まりなどおよそ下らない管理が行われている。入学式は七歳児には退屈そのものの儀式だし、運動会は親でなく地域の有力者を正面に、出し物の完成度を見せるだけで楽しくない。

「いじめ自殺」が多発し、学校はまたぞろ、「対策委員会」「対応マニュアルづくり」と管理を強化しだした。やめてほしい。

とりわけ誰が誰をどう思っているかという「人間関係アンケート」は生徒の先入観を固定し、決して行ってはならないものである。

必要なのは管理ではなく、深い洞察力とことん話しあう勇気ではなかろうか。

（森まゆみ）

1994-2-13/18

毎日新聞（夕刊）1994年（平成6年）1月24日（月曜日）

「ホンネ主義」と世の中

田中角栄、たけし…

森　立花隆さん（「田中角栄と私の二十年」文藝春秋）は、田中角栄は権力的な面ではすごい力を発揮したが、政治家としては大したことはないといっています。一方、早坂茂三さん（「田中政治と細川政治」同）は、東大出の官僚出身の冷たい政治家ばかりの中で、角栄だけが下積みの苦労を肌で知っていた強みを強調しています。戦後「市民革命」を経ないまま民主主義の時代になって、結局、角栄流の人間関係調整や腹芸が力を発揮した。戦後の民主主義そのものから角栄が出てきたことが私たちの問題だと思います。

田中　立花さんは田中を権力の亡者というけれど、政治家は権力亡者であるのは、それほどおかしくない。権力追求の能力のない人に政治をやってくれといったら、大した結果も生まない可能性が強い。ただ私も田中角栄をそんなに高く評価していません。人気があったことは確かでしょうが、農村人口がこんなに減ってしまい、メディアの動き方も遅っている今の時代、仮に田中角栄のような人がいて彼のような人気の取り方をしても、人気は全然出ないと思います。

橋爪　田中さんの政治力の根源は、戦後が根本的なところで自由競争社会ではなかったことに起因するのではないかと思う。貧しくて資源も、資源の配分を受けるチャンスも限られていた時代、だれにどう配分するかは政治の問題で、そこに大きな利権が生まれた。日本が豊かになってからもこのメカニズムは通産省を典型としてずっと持ち越された。権力と資源の配分のメカニズムに通暁していて情報を早くキャッチし、それを整理できる人が一番大きな政治力を持つ。田中氏はそれに全力を挙げた。

竹下派になってからも含めれば、日本の政治を十数年動かし続け、結局、旧田中派自身が分裂したときに自民党も分裂した。自民党の中で自民党政治の要素をすべて吸収し、自民党自身を食い破ってしまった。そういう歴史的意義があったという意味では大きな政治家だったかという気がします。

田中　田中角栄が日本人に人気があったということで、吉田司さんが人物論を書いている（「ビートたけし　ザ・トリックスター」宝島30）ビートたけしとの比較ですが、角栄の場合、人間しょせん色と欲という人間性に関する現実主義を無自覚に、すなおに認めて口にするホンネ主義が、七〇年代はじめに受けたのではないか。

森　たけしも角栄と同じホンネ主義ですね？

田中　ええ。でも、たけしの方は同じホンネ主義でも、それを露悪だと意識している。田中角栄にはインテリへのコンプレックスが異常にあってそれに対する対抗心としてのホンネ主義。たけしは自分の中にインテリ性があって、いきなりホンネ主義をそのまま出すのは恥ずかしいのだと思う。角栄的な泥臭さが人気を失う七〇年代後半から八〇年代になって、露悪を意識的にするたけしの人気が出てきた。吉田さんがいうように、たけしが「フライデー事件」以後だめになっているとしたら、意識した露悪によるホンネ主義も、このごろ受けなくなっていることになりそうです。

橋爪　たけし氏は偽悪、露悪の反知性主義によっていわゆる進歩的知識人の知性とかタテマエを裏いている間はパワーがあった。ところが彼自身が権威に成り上がっていくと、自分で自分を批評しなければならなくなって内向的になってくる。もう一つは彼がメジャーになりすぎて、彼の批判が視聴者にも先読みされ、常識となってしまった。

田中　細川首相についても考えると面白い。田中角栄の全盛期より、今の細川さんの支持率の方が高い。露悪ではないし、「自然体」でいってもホンネ路線にならない。八〇年代後半からの日本社会では露悪とかホンネとかは品性下劣といやがられて、それなりに「自然体」としてにじみ出る形の理想をエリートが体現しているということかもしれない。

森　角栄もたけしもスタンスは違っても、その人気は大衆のコンプレックスみたいなものとつながっている。細川さんの場合、浪花節的なアクやクセがなく、朝シャン時代に受ける気がします。

橋爪　細川さんは「貴種」であって、秀才でも知識人でもない。センスがいいだけ。たけしも細川さんや連立政権をホンネで攻撃しにくい構造になっています。

後書き

「普通の国」という言葉は、その意味する所への賛否はともかく日本の針路を論じる際のキーワードになっています。国際社会の秩序維持のための行動にどの範囲でかかわるか、という湾岸戦争以来、繰り返されているテーマです。座談会では国際的、歴史的背景も含めて語っていただきました。

ただ、日本における「普通の国」論の主唱者が小沢一郎氏であることが問題を複雑にしている点も見逃せません。小沢氏に対しては、故・田中角栄氏直系の金権・強権政治家で、『日本改造計画』という著書名から北一輝を想起させるという議論もあり、内容以前の問題として拒絶反応が起こりがちだからです。今後、さまざまな論議を生産的なものにするためには、この「小沢問題」の克服が大きな課題になるでしょう。（雅）

毎日新聞（夕刊）1994年（平成6年）2月23日（水曜日）

雰囲気と政治力の間

細川さんの「不思議」

田中　「広告批評」が「細川護熙の広告的研究」という特集をやっていますが、これは広告業界の人たちの嗅覚の鋭さを物語っていると思う。細川さんみたいなひとが出てきて、政治も彼らの業界のマーケットになるということがよく分かってきた。アメリカでは七〇年代後半から八〇年代、日本でいう広告業界の人たちが大統領の「振り付け」をやるようになった。日本ではつい最近までそういうことをやらなかった。

森　選挙区を回って手を握って、という直接コミュニケーションだけで票が入った。

田中　小選挙区比例代表並立の新しい選挙制度のもとでは地元コミュニティー密着型よりもテレビでかっこよくやるリーダーの方が有利かもしれない。広告業界にしてみれば今が売りどきということになりますね。

森　今までの政治家批判は、裏にだれかがいてとか、だれとかと料亭で会っていてといったスタイル。細川さんの場合、隠しているものがあって後ろ暗いということではなくて、見せている顔と本当の顔がそんなに乖離していないということを、この特集は言っているんじゃないですか。

橋爪　イメージの中ではどうしても作り出せない、その人にしかないものがあって、細川さんは血筋というかたちでそれを持っている。生まれたときから細川さんで、代議士は落選したら「ただの人」だけど、細川さんは、落選しても細川さん。本当に強い。背伸びをする必要がなくて、素顔を出しているというイメージを作りやすい。実際はどうかは別にしてスキャンダル性も少ない。何をしてもみんなと同じならみんなが感心し、みんなと違えばそれでまたみんなが感心する。

田中　どっちに転んでも得なんですよね。

橋爪　細川さんはけっこう危ない橋をわたってきている。朝日新聞記者をやめたとき、参議院議員、熊本県知事をやめたとき、日本新党を作ったときというように。ふつうの人だと自分のわずかな持ち物を大事にする心理が働いて、そんな危険なことはしない。この人は、それができる。

田中　一年前に細川さんが総理になるなんてだれも思ってなくて、細川さん自身も思ってなかったかもしれないけれど、今になって彼が書いたり、しゃべったりしたものを読むと、ああこの日のためにこの人はこういうことをみんなやってきたんだということがよく分かる。しかも「広告批評」にも書いている人がいますが、中曽根さんみたいに一生懸命に受験勉強してといった感じではない。

森　今までの政治家はポマードでかてかでふんぞり返って上からものを言う、男尊女卑の父権型。細川さんは「広告批評」にも写真がありますが、座り込んで実りの悪い稲をかざしてといった感じの目線の低さ、普通らしさがある。

田中　同じことを言っても細川さんだとソフトになる。政治指導者論についてみると、小沢一郎氏と細川さんの言っていることはほとんど同じです。だけど細川さんだと、みんなそんなに心配しない。

橋爪　細川さんは連立政権の核になっているけれど、自分の手勢はほとんどいない。昔トランプの「ナポレオン」を覚えたころ、私はなかなかナポレオン役ができなかった。手元に絵札がそろわなかったからですが、でもナポレオンは副官を指名するわけだから、ほんの数枚の絵札があればいい。それが分かるのに一年ぐらいかかった。細川さんは「ナポレオン」をやらせたら強いだろうと思う。小沢さんたちはしたたかな計算でかついでいるだろうけれど、かつがれている細川さんもしたたかに計算している。どっちがどっちを政治的に利用しているのか、よく分からない不思議な状態になっている。自民党弱小派閥と竹下派の関係とはずいぶん違う。その点で細川さんの政治家的資質はかなり高いと思います。

森　しかし、それによって小選挙区制も通ってしまった。後で考えると、なんだっただろうかということになりかねないですね。

田中　私は政治改革法が通ってよかったと思いますが、「広告批評」のような批評だけで政治家を見ていると、後で困るということはあり得ると思いますよ。

橋爪　雰囲気について語れるけれど、彼の政治的な部分は、なかなか見えづらい。

後書き

「月刊Asahi」が3月号で休刊になりました。数少ないリベラル、社民系の雑誌の中では老舗の「世界」よりも元気で面白くなっていたと思うので残念です。

矢野直明編集長が「創」3月号にてん末記を書いています。「総合雑誌の任務である新しい思考の座標軸を提供することに失敗した」という総括です。「既成の枠組みが揺れるとき、よくそこに適合してきたものほど苦境に立たされるのは、歴史の必然である」。東西冷戦の枠組みに最も適合した社会党と朝日新聞が典型だそうです。

でも、ちょっと待って下さい。思考の座標軸を提供できずに苦境に立たされたのは、編集部が置かれている「歴史の必然」的な位置のためなのでしょうか。分析としてはわかりやすいのですが、倒産寸前の老舗が一発逆転のヒットを飛ばすことだってあるはずです。

このような発言に接するにつけ、冷戦構造解体の言論界への衝撃の大きさを感じます。それも自信喪失というレベルで。当方も「歴史の必然」にからめとられないように注意したいと思います。（雅）

1994-2-14/18

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)3月22日(火曜日)

「東アジア」からの米国批判

――田中　明彦

同人の一人、田中明彦さんは二月からアメリカに滞在中。今回は「アメリカで雑誌を読む」を寄稿していただいた。

言うまでもなく、アメリカも雑誌の数が多いことでは、日本と同様で、軟らかいものから固いものまで無数にある。筆者の興味を引いたのは、やはり、国際問題や全般的な政治・社会・経済問題を扱ったものであった。

注目すべきは、アジア関連の論文が多いことである。もちろん、対外問題でいえば、十二月のロシア選挙のあとを受けて、ロシア問題分析が多いのは確かである。しかし、このロシア問題にまさるともおとらず、アジアについての論考が多いのである。『フォーリン・ポリシー』(春季)、『インターナショナル・セキュリティ』(冬季)、『ワシントン・クオータリー』(冬季)といった、国際問題専門誌が中国問題、アメリカの東アジア政策、東アジアの国際政治の特徴といったテーマに取り組んでいる。

なぜ、これほど、アジアが取り上げられるのだろうか。一つには、中国問題のように、六月までに最恵国待遇を延長するかどうか結論を出さなければいけないという現実の問題がある。日本との経済問題もある。さらに、昨年十一月に、シアトルでのAPEC非公式首脳会議でのクリントン大統領などの発言に象徴されるように、アメリカ経済のさらなる発展のためには、アジア・太平洋との経済的結びつきが不可欠だとの認識が多いことが、アジアへの関心を高めているのであろう。

ただし、日米関係については、それほど本格的な論考はない。二月の日米首脳会談における包括協議の決裂からまだ時間があまりたっていないこともあるのだろう。また、現在のワシントンの雰囲気からいえば、クリントン政権の対日政策のやり方に批判的な意見をもっている人々も、今のところは、現在の対日強硬策がどの程度うまくいくか見守っているところなのであろう。

いずれにしても、日本を含むアジアへの関心には、きわめて実務的側面からくるものが多い。しかし、これと並んで、より文明論的な関心もあるのかもしれない。経済成長を続ける東アジアに対するアンビバレント(両義的)な評価がそこに見え隠れするのである。この点で、興味深い論考は、二人のシンガポール人のそれである。一つは、リー・クアンユー元首相に『フォーリン・アフェアーズ』(3/4月)が行ったインタビュー記事であり、もう一つはキショー・マーブバニ外務事務次官が『ワシントン・クオータリー』(春季)に投稿した「若者よ、東に向かえアメリカへ」と題する刺激的な論文である。

どちらも、アメリカ社会に対する痛烈な批判である。リー・クアンユーは、銃、麻薬、暴力犯罪、浮浪者などに見られるように、アメリカでは「市民社会の崩壊」が起こっており、この原因には、個人の道徳の頽廃、過剰な自由があると主張する。マーブバニもまた、アジア人の目には、アメリカ社会の根本がおかしくなっているように見えると指摘し、リー・クアンユーよりもさらに厳しく、アメリカにおける過剰な自由、過剰な個人主義、自らの責任に気がつかない勝手なマスコミ、そして民主主義であれば何でも良しとする「知的化石化」が、この「社会的頽廃」の背景にあるというのである。リー・クアンユーは、そこまで言わないが、マーブバニは、アメリカ人は、少しは自らの傲慢に気がついて、アジアから学ぼうという姿勢を示すべきだと主張する。

現在のアメリカの問題が、銃であり、麻薬であり、暴力であることは、アメリカ人の多くも気がついている。問題は、それをどう解決するかだ。マーブバニの言うように、アメリカ人が他国の経験から学ぼうとすることは必要であろう。しかし、マーブバニが、「東アジアでは」と言うほど、東アジアは均質ではない。人口二百八十万の都市国家シンガポールでは行えたかもしれない警察国家的手法は、同じ東アジアでも、何がしかの民主的制度を守ろうとすれば、不可能であろう。マーブバニの指摘する自由の弊害、マスコミの無責任は、日本にも見られる。その半面、マーブバニが良しとする東アジア「大家族主義」の伝統は、日本の都市社会ではほとんど見られない。アメリカ人は、東アジアから学ばなければならないのは確かだし、過剰な自由を制約すること、家族を重視することも確実に必要であろう。しかし、東アジアに単一の解答があるかといえば、そうではない。

(東大助教授・国際関係論)

後書き

常連の田中明彦さんの長期出張という機会をとらえ、米本昌平さんを交えて新機軸を試みました。細川連立政権の誕生以来、主に政治・経済の目まぐるしい動きの背景に目を凝らしてきましたが、目を転じれば重要テーマがごろごろ転がっていることがわかります。

まず「原子力」です。政治や国家との関係を抜きにしては語れない「原子力」の持つ意味はポスト冷戦で大きく変わりました。北朝鮮への核査察問題、四月に臨界を迎える高速増殖炉「もんじゅ」、米国に高まる「日本核武装論」などの最近の動きをみると、今こそ冷戦期以上に複眼的、総合的な視点が必要だと痛感します。

最初、座談会の素材はいわゆる「科学雑誌」で、と思ったのですが、あまりにも「論」がなく、今回の素材に落ち着きました。これも日本の「科学の論じられ方」の特徴の一つだと思います。(雅)

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)4月21日(木曜日)

苦境のホワイトカラー

リストラと中高年

森　鎌田慧さんが管理職組合の話を書いています(「リストラ列島の表情」世界)。どのくらい人間性をためにされているか、すさまじい話です。会社主義はもうどうしようもない、早く幻想を捨て抵抗せよと言う。

田中　今回の不況で一番危機にさらされている中高年の人たちが勤め始めたときは、こんなはずじゃなかった。終身雇用とひきかえに会社人間になって会社に尽くすということだったから、会社の方がある種の契約不履行をしてきても、それに対抗するノウハウを身につけることがないまま、いまの状況に追い込まれてしまった。そういう人に会社人間をやめて自己を見つめて生きましょうと言っても、励まし言葉にしかならない気がします。

橋爪　資本主義に、本来首切りはある。終身雇用は資本主義の必然でもないし、日本社会の必然でもなくて、ついこの二、三十年の間にできた慣行だった。でも、そういう時期に就職した人は、そういうものだと思うものです。ただ「若かったときに考えていた話と違う」ということだけなら、戦後の軍国少年だって、文明開化の武士にだって、歴史上しょっちゅうあったんです。

森　でも、そういう人たちが大量に出ていて、自己救済能力がないということになると、ちょっとかわいそう。

田中　中内切さんも言っているように(「平成不況下、わが執念の経営術」宝石)、今の不況はそんなに深刻ではない。昭和初期の恐慌と違うのは、日本全体の経済水準が驚くほど高くなっていることです。マイナス成長でも昭和初期のように悲惨なことにはならない。

松原隆一郎さんもふれているように(「サラリーマン評論は本当に役に立つのか?」宝島30)、日本のホワイトカラーは生産性が本当に低い。戦後の日本の経済発展は生産性の高いブルーカラーの力だった。ホワイトカラーは、いままでいい目を見過ぎていた面はある。いま肩たたきされたりして悲惨だとか言われているわけですが、これは日本経済の構造転換の必要性を物語っているともいえる。一番非効率な中高年のホワイトカラーを切ろうというのはちょっと残酷ですが企業にとっては当たり前でしょう。

森　そういう人たちを地域で、みんな引き受けている。長寿社会だというのに五十何歳で会社からよれよれになってほうり出され、威張っているだけの男の人たちを地域が面倒見ている。もっとソフトランディングするようにしても らわないと。ベンチャービジネスに飛び込めとか、自分で企業をおこせと言っている人もいますけれど(日下公人「『本業回帰』ではニューミスト4/19)。新しいマーケットが見えない」(エコノミスト4/19)。

橋爪　そういう可能性がなさ過ぎる社会が問題だと思う。労働移動の機会が日本のホワイトカラーは異様に限られている。大工さんや左官屋さんは労働市場があって、賃金体系も若年でいきなり最高レベルになる。年を取ってくると企業の年功賃金に比べて不利になってくるけれど、生涯賃金がもし同じなら若いときに貯金して、年を取ったら親方になって若い者を使うといった生活設計もできる。ホワイトカラーの場合、若年のときは賃金が低くてがまんしていれば昇給する。猛烈に働かされようと、そこで辞めたら損だから会社人間になっていく。こういう構造を打破するのはいいことだと思う。それがさらに進めば、たとえば政府の機関と企業、大学、国会議員、地方議員といった間の人間の移動が可能になって、本当の能力主義社会になっていくんじゃないでしょうか。

森　うーん、理論的にはよく分かるんですけど……。

橋爪　定年というと突然仕事がなくなるわけですが、報酬の面はある程度度外視しても、生涯労働というかたちで働けるうちは働けるというシステムを地域も企業も考えないといけないと思う。

森　私たちの地域出版社もそうですが、寄らば大樹でなくて医療、老人介護、環境など自分の頭で考えたスモール・ビジネスが成り立てば本当のリストラになると思うのですけれども。

田中　日本の生活水準は上がっているから、年功賃金の最後の一番高いところをもらわないと生活できないなんてことはない。それだけの収入を得る仕事を見つける機会はけっこうあると思います。

後書き

内政、外交がめまぐるしく動く昨今は、月刊誌編集者泣かせの時期と言えるでしょう。細川首相の退陣表明は四月八日、こうした重要な事態が起きた後に発売された月刊誌がワンテンポ遅れた印象になるのは否めません。作る側の先見性が問われる時代といってもいいでしょう。

もちろん、このような時代でも月刊誌、季刊誌が得意とする部分はあります。派手な現象のかげでゆったりと大きな力で動いている底流を把握することです。ある程度の分量を要するので週刊誌は手を出しにくい。その点では「文明の衝突」論を意識した最近の「季刊アステイオン」や「現代思想」4月号の「リベラリズム特集」、「海燕」の差別問題特集などは力のこもった企画だと思いました。最近は一つ一つの論文が概して短くなっているようなので、力作を読みたい気がしていたからです。

西部邁氏が主幹を務める保守主義の雑誌「発言者」が創刊されました。ここでも目玉になる力作が欲しいと思います。(雅)

1994-2-15/18

毎日新聞（夕刊）　1994年（平成6年）6月21日（火曜日）

表現の自由とその責任

「断筆宣言」批判から

森　「諸君！」で浅田彰さんが筒井康隆さんの「断筆宣言」を批判しています（筒井康隆氏はやはり間違っている）。いま差別・反差別の問題が論じられている背景には、冷戦構造が崩れた後の左翼のタテマエを批判して大衆のホンネに居直るという時代状況があるという指摘は納得しました。

田中　浅田さんが、問題の「無人警察」が教科書に載ったことと表現の自由とを混同してはいけないと言っている点は、昨年九月にこの欄で私たちも話し合った。

森　インタビュアーの井田真木子さんがいいことを言っていると思いました。「断筆」という行為を行うだけでなく、それを「宣言」する。それが十六万人にも読まれる。お笑い芸人は差別を指摘されても〝断お笑い〟なんてことは言えない。その点に筒井さんの特権的立場があるということだと思いますが、これは共感しました。

橋爪　それはどうかな。たしかにすべての表現者が「断筆宣言」しないと、筒井さんの主張は一〇〇％通らない。ぎりぎりでやっている人は、そんなことできないという構造から見れば、筒井さんの意図を裏切って、今度の宣言は失敗してしまう心配もある。でも、そのコストは筒井さんが全部ひっかぶっているわけで、宣言によって確かに問題が大きく広がった。その「功績」は認めなければいけないと思う。私は浅田さんのように「間違っている」とは言いたくない。残念なやり方だったということです。

田中　筒井氏の「断筆宣言」によって差別語についての議論は、そんな悪い方にねじ曲げられているというようには思わない。「差別語リスト」なるものを単一につくって機械的にあてはめればいいという安易な態度に対して批判が投げかけられて、それなりの議論が生まれたわけですから。

森　筒井さんが問題提起をした意味は確かにあると思いますが、浅田さんが言っている言い方でいえば、筒井さんは表現における絶対的な自由を主張するに当たって、それに伴う絶対的不自由について自覚があるんだろうかという気がしています。

田中　浅田氏は、ここで表現に伴う絶対的不自由を引き受けつつ表現の絶対的自由を追求していくのが一流の作家だといっているようにも思えますね。

森　「週刊金曜日」の座談会（「差別語」の背後にあるもの）では、屠場で働いている金沢茂雄さんが、殺人現場の比喩に「屠殺場みたいだ」と使われることがあるけれど、これは「殺人現場」でいいではないかと、自分たちは主張しているんだと言っています。例えば、どうしても「女中」でないとおかしいときに「お手伝い」にしろとかいうのとは違うということで、それはよく分かる。ただ「屠場を描いている作品で『あっ、これだ』っていうものに我々はまだ出会ってない」と言っているのは、よく分からない。

橋爪　自分たちの属するマイノリティーの場がマイナス価値と周囲の人に見られている。マイナス価値を表現している言葉、つまり差別語が使われると、その状態が再生産されてしまうから、表現を禁止してくれというのが「差別語狩り」です。でも、プラス価値を自分たちで見つけて社会的に表現していくという態度を取らない限り、差別を終わらせることはできない。

森　「週刊金曜日」の座談会では映画監督の崔洋一さんがそういう発言をしています。日常にある、ありふれた言葉を「差別語」だからと使わないんじゃなくて、それをいっぱい使いながら差別の状況を逆転していくような映画を作ったらどうですかと、金沢さんに言っています。

橋爪　差別語についての規制は全部なくしたらいい。その代わり、差別表現をした人は社会的責任を取りなさいという原則をはっきりさせる。メディアは関係ない。

田中　メディアが強制するのは私も賛成しない。程度の差こそあれ問題のある言葉を使うかどうか、その程度を判断するのは個々人の問題でしょう。

橋爪　それは品性の問題、道徳の問題で、法律になじまない。「差別語リスト」は品性を表現する手段を奪ってしまう。劣等な表現をする可能性があるからこそ品性があり得る。リストは一刻も早くなくし、そのうえで差別をなくす方法を考えるべきだ。その点では合意ができるんじゃないですか。

後書き

林健太郎氏が「侵略は自明」と永野発言を批判し、坂本義和氏が「平和主義」の苦しい総括をする。それぞれ冷戦期に対立する立場の代表的な論客の方が、今このように語っておられるのに接するにつけ、時代が確実に変わってきたことを実感します。

「雑誌を読む」は昨年七月にスタートしたので、ちょうど一年になりました。五五年体制という国内の冷戦構造の崩壊とともに歩んで来たわけです。内外ともに新しい枠組みを模索する過渡期が続いていますが、この欄もより質の高いものを求めて試行錯誤を続けたいと思います。皆様のご意見、ご感想などありましたら、毎日新聞東京本社学芸部「雑誌を読む」係にお寄せください。

なお、来月からは田中明彦さんに代わって静岡県立大学教授（国際関係論）の中西輝政さんが登場します。田中さんはオックスフォード大で研究のため渡英する予定です。（雅）

毎日新聞（夕刊）　1994年（平成6年）5月24日（火曜日）

消えつつあるタブー

男と女とポルノ

田中　「クレア」（セックスよりセクシー　ポルノな気分）や「自由時間」（30代からの男の性女の性）の特集などがありますが、このジャンルは私は本当にわけが分からないんで、初めて読むようなものばかりですが、雑誌が男性ヌードを載せたり、女性はどうしたら感じるかといったことをそのまま書くとかいうことはわりと新しいことなんですか。

森　このところ急に多くなったという感じがしませんか。

橋爪　「アンアン」の「SEXできれいになる」という特集がきっかけだった、という気がします。五年くらい前ですか。

田中　女性向けの漫画はだいぶ、すすんでいるということを聞きましたが。

森　レディースコミックというジャンルですね。この性描写は相当早くから過激になっていたみたいです。

田中　そういうのをおじさんたちが読んでいるんじゃなくて若い女性が読んでいる。そのへんがいつごろからなんですか。

森　ずいぶん前からでしょう。でも、それは男の人用のエロチックな雑誌の女性版で風俗ものといった感じで一般ジャーナリズムとは違うものだったけれども、このところは普通の雑誌が取り上げるようになったということではないでしょうか。

橋爪　なにしろ文藝春秋が出している「クレア」ですからね。

森　ゲイやレスビアンへのタブーが薄れてきて、同時にフェミニズムの流れがあって、「見られる」一方ではいやだという女性の意識を取り上げる雑誌が相当出てきた。でも、これは少し突出した女性の意識かなという気がします。少なくとも私は見たくない。

橋爪　十五年くらい前までのフェミニズムだと、ポルノや性の商品化は男性中心主義の産物で、男女平等が進めば、だんだんなくなっていくはずだし、そういうものは悪いものなんだという議論をしていた。私はそれは少し違うという気がしていました。

田中　男女平等化が進んでいくと、性は両性にとって商品化していく、と？

橋爪　ええ。女性の中にもそういうことを考えた人がいて、「クレア」の特集などにもありますが、女性のためのポルノだとか、男性のヌードグラフィックだとか、AVだとかが続々出てきているという。これは最近の特徴ではないかというんです。

森　でも、この「クレア」の男性ヌードは、ちょっと……。

田中　これは、あえて醜く撮ったとしか思えないですね。

森　裸の人相書き、とでもいうか（笑い）。

橋爪　でも、これ自体ポルノというわけではない。女性が最近「セックスよりセクシー」というポルノな気分になってきている現象があるけれど、それはどういうものかということについての、批評なんですから。

田中　「マルコポーロ」の「脱衣の男たち」の男性ヌードの方は、作品としてねらっているところが理解可能だという気がしますね。

森　モデルを募集しているということですが、これを撮って文章を書いている人は男か女かよく分からない名前にしていますが、文体は女性のもの。面白い試みでしょうが、やはり新しいことをやって目立ちたい、受けたいということがあるんでしょうね。

田中　「クレア」などに出ていることは、男がやってきたのと同じことを女もしてみましょうねという話なんでしょうか。

橋爪　いまのところは、男性がいままでやってきたことぐらいなら女性にもできることを確認して、女性が特別ではないんだと主張したいという段階ではないでしょうか。

田中　必ずしもみんなが好きとは限らないし、需要が生まれるかどうか分からないけれど、とりあえずはそういうことが可能であってタブーではありませんよということを確認する作業がいま進んでいるということですか。

橋爪　その作業がすんだ先がどうなるかはまだ分かりません。

森　既存の概念を少しずつ変更しようとする女の人の言葉がとても多く出てきている気がしました。「クレア」の松浦理英子さんのインタビュー（「性器なんていらない」）も、その点でとても共感できました。

後書き

座談会後の雑談で、福田和也氏が「Voice」に書いている小文にある次のような指摘について意見を聞いてみました。北朝鮮問題の論議が、アメリカに恥ずかしくないように、国際社会の手前、何をすべきか、という議論に聞こえる。脅かされているのは「日本の国際的地位」でなく「国民の生命や財産」であるはずなのに他人事のようだ、という記述です。

これについては橋爪、田中両氏の分析が興味深かった。「『日本人の安全』は当然の前提としているのだけれど、最初からそれを言うと頭に血がのぼってしまう人が多いので、言わないで議論しているのではないか」というのです。

確かに生命財産への危機となると、急に勇ましい議論になってしまい、その勇ましさへの反発も過激になる。安全保障の問題は戦後の中心的な政治的争点だったので、右も左も火をつければすぐに燃え上がる人が多いのかもしれません。

安全保障について、頭に血が上らずに、他人事でなく論議できる作法ができてくれば、論議はもっと明快になると思います。（雅）

毎日新聞 1994年（平成6年）7月25日（月曜日）

感覚鋭い「かわいい女」

真紀子さんの人気

橋爪　田中真紀子さんが村山内閣の閣僚になって、週刊誌などがずいぶんと話題にしています。真紀子さんが、新潟三区から立候補した当初は「なにをいまごろ割り込んできて……」と泡まつ候補扱いだった。それが当選したら手のひらを返したように、昔角栄氏が首相になったときのように庶民感覚を持ったすばらしい人が政治家になってくれてよかったという論調になった。メディアはこんなに無責任でいいのだろうかと思う。それはともかく真紀子さんの場合、外国人記者クラブでの講演が転換点になった。ああいうパフォーマンスが出来る人は、男性を含めて日本の政治家にも一般人にもほとんどいない。あれで彼女に対する認識ががらっと変わったと思います。

森　私は真紀子さんというと、ソフィア・ローレンを思い出す。口が大きい、陽気なイタリア女。あけすけで、庶民派で。そういう花のある派手な珍しい政治家が出て来た点では評価したい。それに、あれだけ毒舌で意気軒高なんだけれど「女性自身」（7／19）なんかが書いているように、愛情弁当を作り、夫を立て、子供たちを大事にして、いい家庭を守っているという線をはずさない。「夫を立てるかわいい女」のイメージを上手に作っているところは、うまいと思う。

中西　古いタイプの日本の男性だった田中角栄氏が「お前が男だったらなあ」と言ったそうですが、逆に女性だったからこれだけ注目を浴びている。大学で教えていると女性は活発で反応もいい。政治の担い手として「男性よりもいいな」と政治学者としても感じる場面が多い。ところが就職の問題になると、女性は壁にぶつかってしまう。日本社会で改革されていない部分がどこにあるかをよく示しています。

真紀子さんは福祉の問題に政策的にアプローチしようとしていますが、この二年間で大きく変わる健康保険法の問題で、彼女が厚生大臣をやるならどういうことをするのか、政治家として発言してもらいたい。政治感覚の鋭い彼女が小沢さんに代表されるような古いタイプの政治家とどう付き合っていくのかも注目したいですね。

森　田中角栄が首相になったときにマスコミがこぞって持ち上げ、陳情が来るとなんでも「よっしゃ」といって引き受けてしまう素晴らしい人だなどと書かれた。結局そういう親分的体質が利権を生んでいったわけで、真紀子さんにも角栄に似たところがあるんじゃないかと思う。角栄が古い政治手法で築き上げた財産を受け継ぎ、ファミリー企業の重役もしていて、自分は庶民感覚で角栄とは違うことをやるんだといってもちょっと納得しかねるところがあります。

橋爪　いま政治家は二世議員が非常に多い。政治家という特殊な職業は、ふつうに人材をリクルートしにくい面があるのです。真紀子さんのように二国の首相で派閥の領袖（りょうしゅう）である人が目の前にいていろいろ見聞きし、話を聞く。それが無形の財産になる。ほかの二世議員にしても大なり小なり、そういう面があって、政治家として厳しい修羅場を乗り切れる。これは現状ではやむを得ないことですが、真紀子さんのようなタイプの人が二世でなかろうと政治の世界に入っていける道はないのか、われわれとしても考えないといけないと思います。

森　どうして、こんなに女性誌が真紀子さんを取り上げるんでしょうか。「ヒロイン」がほかにいないんですね。

橋爪　雅子妃殿下、松田聖子、その次が真紀子さんなのだそうです。真紀子さんも毎週新しいことを言ったりやったりしてくれるところが貴重なんでしょうね。

森　香水のプレゼントをもらったら、政界のクサミを消すためかしらなんてジョークを言ったりして（週刊女性7／26ほか）。

中西　そういう感覚がすごいですね。でもこれだけ取り上げられるのをみて、日本の政治のとてつもない混迷を国民が感じていて真紀子さんの存在に「一条の光」みたいなものを見ているような構造を思い浮かべます。英国のサッチャーが保守党の党首になり首相になったときも、女性が指導者のときは国力が上がるといった縁起をかつぐような雰囲気もあって、ある種のブームがあった。日本政治の混迷の中、真紀子さんが指導者として登場する場面が意外と早くくるかもしれません。

後書き

「守旧派」「ハト派・民権派」「自民タカ派と社党国対族内閣」「五五年体制の復活」「五五年体制の完全崩壊」「腐敗と無責任の連立」「護憲リベラル」「腐敗と無責任の村山政権」……村山政権に対する分裂した評価が、今の政治の様子を物語っています。まるで人魚の顔を見た人と、尾を見た人が「とびきりの美女だ」「いや、下等な魚類だ」と言い合っているようです。どこを見たか（見たいか）で評価が変わる。昨年の細川政権発足以来のことですが、今回特に目立ちます。

細川政権について口を極めてのしっていた「発言者」と「週刊金曜日」が、それぞれ「守旧・保守」「護憲・リベラル」であることを理由に村山政権支持の編集になっているのを見て、特にその印象を深めました。

「雑誌を読む」、中西輝政さんを招いての第一回はテーマ選びに苦労しました。例によって月末の政変。月刊誌の多くは対応できていないため、週刊誌を中心に話し合っていただきました。（雅）

毎日新聞（夕刊）1994年（平成6年）8月16日（火曜日）

1994-2
10/18

偏見の中の「死」と「人生」

エイズの語られ方

橋爪　エイズ患者の平田豊さんが亡くなって吉岡忍さんがルポを書いています（婦人公論）。吉岡さんは平田さんが亡くなったときに病院から遺体をこっそり知り合いのお寺に運んだのだそうです。平田さんはエイズ患者であることを公表していたけれど、家族のことを考えてペンネームを使っていた。でもお葬式になると、家族とのつながりが明らかになってしまうので、それをカムフラージュするためだった。エイズにかかわるさまざまな差別や偏見の深さを改めて思い知らされるようなエピソードだと思いました。

森　吉岡さんは平田さんを取材対象としてではなく人間同士として共生していく立場で付き合っていたんだなということがよく分かりました。それと、プライバシーは単なる私人としての秘密ということではなくて、情報化の現代にあっては自分についての情報を自分で管理する権利なんだと言っている点は大事なことだと思いました。

中西　世紀末の病と言われるエイズですが、むしろ二十一世紀的な思考が要求されると思う。セックスを控えろという教育にしろ、それに反発する側の議論にしろ、モラルを大上段に打ち出していて、感染や病気が広がるリスクを考えたとき、二十世紀的な議論に思えます。吉岡さんのルポでは、エイズになったからこそ会えた人にいっぱい会って、本当に楽しかったという平田さんの最後の言葉が印象的でした。高度消費社会にあって見えなくなっている「死」の問題や人生の意味を、エイズを通じて私たちが考えさせられるという側面があるように思う。モノの豊かさから人生における心の充実へと振り子が振り戻してくるのが二十一世紀なのかもしれない。

橋爪　「週刊SPA！」（8／10・17）に、HIV感染を公表（カミングアウト）したゲイの人の話が出ています（パワフルHIVポジティブ　パトリックのカミングアウト大作戦）。確かに差別や排除の標的にはなりやすいけれど、逆にゲイのグループが支持してくれて仲間も見つかる。だから、積極的にカミングアウトする人たちが現れるし、それが患者としての自分のアイデンティティーにもなって、残った人生を充実させていこうという選択肢のひとつとなる。日本では、こういうスタイルの人はまだ全然現れていない。平田さんの場合も自らエイズを公表した第一号ということでジャーナリズムに取り上げられ、その希少価値によって充実が得られたわけで、パトリックの例とちょっと違います。

森　日本とアメリカでは患者や感染者の数が圧倒的に違うということもありますね。

橋爪　もちろんそうですが、カミングアウトすることのリスクがまだ極めて高いんだろうと思う。

中西　それはやはりモラルの問題があると思う。病気としてまず実際的な対応があるべきで、それとモラルの問題とどうバランスさせるかということですが、エイズ先進国のアメリカの場合、だんだんそれについての知恵を身につけつつある。日本の場合、非常に遅れていて、今度の国際エイズ会議でも主催者側の代表が、エイズはアメリカ的性風俗がやってきた結果日本でも蔓延したといったようなモラリスティックな発言をして問題になった。ここにはエイズ後進国であることと同時にモラルにかかわる日本の文化的な問題が表れているように思います。病院でさえ「AERA」（8／8）のルポにもあるように、エイズ患者を避けるという現状です。

森　「世界」のグラビア（土橋正之「エイズを生きる――アメリカのHIV感染者たち」）は、よかった。文章も現状を淡々と報告し実名で写真が出ていますが、アメリカでもエイズに対する偏見は根強いんですね。

橋爪　「日本らい史」という本の書評をしたことがありますが、最初ハンセン病は遺伝するという偏見があった。それが伝染病と分かったら、こんどは患者を隔離しすぎる別な偏見が強まって患者の生活改善にはつながらなかった。エイズの場合も同じで、医学的知識を正しく普及させて行くことは大事ですが、それで偏見がなくなるとは限らない。医学的知識を普及させることと別の課題として偏見の除去を進めていかないと、患者が自己防衛的になってしまい、対策が遅れてしまう。この点を早急にきちんと認識する必要があると思います。

後書き

先月、「発言者」と「週刊金曜日」が村山政権支持の方向で編集しているとお伝えしましたが、今月の各誌の村山政権への姿勢を分類してみます。肯定論が多い＝世界、軍縮問題資料。批判論が多い＝文藝春秋、中央公論、正論、THIS IS読売、潮、宝石。両論混在＝現代、サンサーラ、Voice、諸君！、エコノミスト。

しかし、今月の各誌の特集で断然多かったのは北朝鮮関係でした。次いで戦後四十九年ものと村山政権論。衝撃度からいって北朝鮮関係がトップなのはわかりますが、日本の政権交代についての論評の少なさは意外でした。連立政権の評価がしにくいからなのか、国内政治そのものが退屈なテーマになってしまったからなのか。自衛隊合憲論へと転換した社会党についても、まとまった論文、解説がほとんどないのです。「過去」の歴史の風化が言われますが、その土台として「現在」のきちんとした歴史的位置付けが必要だろうと、自戒を込めて思います。（雅）

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)9月20日(火曜日)

1994-2
17/18

「文化・伝統」と「法律」の間

夫婦別姓と家族

森　法制審議会小委員会の婚姻制度に関する民法改正要綱試案が出て、夫婦別姓や家族のゆくえなどについて書かれたものがいくつかあります。夫婦別姓について試案で出された案は三つ。原則同姓で別姓可のA案、原則別姓で同姓も可とするB案、法的には同姓以外は認めないが通称使用は公認するC案。本田靖春さんの「男たちよ!夫婦別姓を支持しよう」(現代)などは、一番進んだB案でいいじゃないかと言っています。一方で、子どもが生まれたときにどっちの姓をとるのか、家族の一体感はどうなるかという点から別姓反対論も出ています。

中西　本田さんが「男親のこどもに対する愛情は、女親のそれに較べると紙のように薄い」といったことを書いていて驚きました。こういう父親観の人の議論を全体的に信頼していいのかどうかという気がする。石川英輔さんが夫婦同姓を公式に決めた明治三十一年実施の明治民法以前は日本の伝統はアジアの習慣として根づいていた別姓だったと指摘しています(「夫婦別姓について」Voice)。明治政府が西欧の習慣を取り入れて同姓になったということですが、この問題でも文化や伝統を考えることは重要だと思います。

橋爪　全体に見ると、トンチンカンな俗論が多い。家族の一体感という議論もそうですが、今の戸籍制度が明治以後の新しいものであることや姓がどういうものかについての基礎的知識がないことによる誤解もある。戸籍は日本と韓国にしかないわけだし、名前に関して法律で決めてない国も多いことも知らないで、身の回りのごく限られた「常識」だけで議論している。ジャーナリズムがこういう水準のものを「夫婦別姓についての議論」としてどんどん載せているのは困ったもんだと思います。

中西　姓の問題でいえば、日本国籍を取得する外国人の姓の制限の方がよほど気になる。ウィリアム・ジェームズという日本人がいてもいいんで、文化をものすごく狭く画一的に考える姿勢がある。夫婦別姓の問題にしても、たかだか明治以後のものを伝統と考えている。制度や人間集団における日本社会のフレキシビリティーの欠如を感じます。「日本的な姓でなければいけない」という強制や夫婦同姓・別姓を法律でしばる発想は、習俗のレベルに国家が介入することでもあります。

橋爪　名前に代表されるような個人の自由を不必要にしばる法律は変えていく。その一環として夫婦別姓を求める運動があるべきです。その点で「Voice」の特集の中では、松原惇子さんが、戸籍をそのままにしておいて夫婦別姓の法律改正で済ましてしまうと、かえってよくないと主張していて、これは正しい指摘だと思いました。

森　戸籍が家族単位から個人単位に改正されるきっかけになればということで、その点は私も賛成です。ただ全体的には、林真理子さんが「朝日新聞」家庭欄(9/11朝刊)のエッセーで書いていたことと同じで、働いている女性から見た専業主婦批判がかなり強く出ています。「なんだかんだといって結婚して籍に入っている女性は法律で守られている」のであって「対外的には個人として扱われたいというのは少し勝手ではないだろうか」という、それは問題の混同です。

中西　夫婦別姓の問題は根本的に「家」の制度につながってきます。「家」は戦後の新民法でなくなったという公式の解釈は、憲法九条があるから「軍隊」はないというのと同じで、戦後の日本の現実との間にズレがある。「家」の制度は明治に日本の民衆の伝統とは違うものが作られた。戦後はアメリカから輸入された新しい民法は、これを否定したけれど、戦後社会の現実とはまたズレが生まれた。この二重のズレにまで視野を広げないと、家族の一体性といった言い方しか出てこない。

森　山田昌弘さんの「『夫婦リストラ』が始まる」(諸君!)がやや深くとらえていますね。「感情表現の自由化」というトレンドのなかでみている。

橋爪　夫婦同姓を法律で決めるなど、法律と市民社会の関係についての誤解の産物なのです。戦後、占領軍は日本の市民生活の現状が封建的、軍国主義的で間違っているので緊急避難的に法律で変えてしまえと考えた。だから、事情が変わればすぐなくさなければならなかったのに、そのままになってしまった。

後書き

安保理常任理事国入りを考える際には、中西輝政さんが指摘しておられるように、日米、アジア、途上国、国連そのもの、などの軸への微妙なバランスに目配りをしなければならない。その中で、日本自身の新しいアイデンティティーを構築しなければならないというやっかいな問題です。私たちは冷戦下では過過することのなかった複雑な方程式に直面することになるわけです。

「なぜアメリカは『小沢一郎』を警戒するのか」(手嶋龍一氏・フォーサイト)によると、訪米した小沢氏とアメリカの情報関係者の秘密会合で、米国側は小沢氏の言う「日米同盟論」と「国連中心主義」の関係に疑念を持ち、日米同盟から緩やかな離脱をはかるために国連の集団安全保障体制への参入を目指しているのではないかとの警戒心を持ったそうです。複雑な方程式の「日米」部分だけをとってみても、多くの微妙な問題が含まれていることを示す興味深いリポートでした。(雅)

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)10月24日(月曜日)

日・米・中の問題として

日本にとっての台湾

森　広島アジア大会に招待された台湾の李登輝総統が中国の反対で来日できなかった問題を論じた記事がかなりあります。OCA(アジア・オリンピック評議会)アーマド会長が招待し、李さんも訪日の意向を示した。ところが、中国の難色でアーマドさんが招待を取り消し、結局、台湾からは副首相が来たということです。

橋爪　全体的に李登輝総統訪日が実現すればよかったのに、といった台湾側に同情的な議論が多かったのが印象的でした。

森　ただ、新聞はあまり判断を示していないようです。

橋爪　「文藝春秋」の「新聞エンマ帳」は、「朝日」社説が「現在の国際情勢下で、李総統を招待すれば、中国が反発するのは目に見えていた」とOCAを批判するのは本末転倒と言っている。その通りだと思います。

中西　新聞メディアがこの問題を評論するのを難しくしているのは、ここ数年大きな流れとして台湾についての中国の態度が中国側から言えば無原則になっていることです。インドネシアなどにも実質的には李総統が「正式訪問」しているのに中国側はきちんと対応していない。この点が「二つの中国」を認めないという日中平和友好条約の原則が大事だとしてきた日本人を戸惑わせています。中嶋嶺雄さん(「一つの台湾、一つの中国」諸君!)、伊藤潔さん(「李登輝総統『来日拒否』の無礼」文藝春秋)、それに「Voice」の入江隆則さん(中国に「叩頭」した日本外交)いずれも指摘していますが、経済的政治的実体としての台湾の地位がいま上がっている。ただ、今後の動きの見極めが、まだ付かないところもある。そこにはスポーツと政治を混同するなといった次元を超えた大きな問題があります。

森　中国はそういった無原則な対応をしているのに、李登輝総統の訪日についてはどうして原則的な要求をしたのですか。

中西　李さんは、すでに東南アジアをはじめかなりの国を訪問している。中国との対等の国家性を主張できる方向につながる国では、日本とアメリカしか残されていない。ポスト鄧小平の時代に向けてこのままではガタガタになってしまうということもあって、ここにきて中国政府にある種の反省が出てきた。それに、中国には米中関係は大切にしたいという意識があって、たたきやすい相手として日本が浮かび上がってくるという背景があると思う。

橋爪　ここで騒げば第三次円借款の交渉が有利になると計算している、という説も聞きました。

中西　米中関係が天安門事件以前に戻ってきている兆候がある。この流れが今後どうなるか。李登輝さんの訪日問題は、日米中の三国のバランスをどうとってゆくかという、冷戦後の世界における日本の大きな政策スタンスの問題と結びついている。そういう論議がほしかった。野田宣雄さん(「世界新秩序からの脱落」文藝春秋)が少しふれていますが。

橋爪　野田論文は説得的でした。アメリカは将来中国が次の体制に移行するのを見越して手を打っている。その重要な一つが台湾の問題で「一つの中国」を認めつつ、台湾に軍事援助したりしてバランスをとっている。ところが、日本は、その感覚が全く分かっていない。「過去を反省する」と言うけれど、結局現政権におもねるだけであって、これでは中国の人民に対して、あるいは歴史に対して責任を取ったことにならない。歴史感覚が全く欠落している。こういう指摘に共感しました。入江論文は、日中平和友好条約と日中共同声明の解釈の原点に戻る立場から問題を整理して、日本政府はこのときの交渉経過を十分に勉強していないのではないかと指摘していて、説得力を感じました。もともと中国側と日本側にはズレがあったわけで、中国側が自分の主張を繰り返すたびに、日本がそれを百%うのみにするのは条約・宣言の精神ではないということです。

森　野田さんの指摘は、私も共感しました。統一ドイツの問題から「文明の衝突」まで広くふれていますが、謝罪すべき相手は中国人民であって、現在の政権に対してではない、といっています。きちんとした謝罪をしていないから、それが交渉材料になっていつも同じことが繰り返されるのだと思います。

後書き

今月は趣向を変え「美しくなりたい」ということの周辺を取り上げました。素材は主に女性誌ですが、それを通じて日本社会の一断面が描ければという狙いです。

橋爪さんが指摘しておられましたが、「クレア」のように政治経済のいわゆる「硬い」内容も取り上げている雑誌は少数派です。また、一般に女性誌で社会的テーマを取り上げるときは、「女性にもわかりやすく」という発想が前面に出すぎてしまい、深く知りたい人にとっては中途半端な内容になりがちです。

知的女性向けの雑誌では、映画演劇はじめ「文化」の領域で総合雑誌もかなわない難解でファッショナブルな文章を書く筆者が平気で登場します。でも、ここでもなぜか、政治経済方面は相性が悪いようです。おそらく、雑誌を作る人たちが、「女性は政治経済への参加が少ないので、知的関心は文化領域に限られる」と考えているからかもしれません。でも果たしてそうなのでしょうか。(雅)

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)11月21日(月曜日)

1994-2
18/18

拡大する男女のすれ違い

変わる家族・夫婦

中西　二つ目のテーマは「家族」ですが、いろいろ読んでみて、これは現代の日本人にとって「憲法」よりもはるかにリアルで根底的な問題かもしれないと思いました。とりわけ「夫婦」の問題。「婦人公論」の座談会（ああ定年、夫の在宅がストレス！）にしても、ここには戦後の日本が集約されている気がします。会社人間である夫、専業主婦を強いられてきた中高年女性。この組み合わせは戦後日本そのものです。

森　妻が定年後の夫を呼ぶ表現は、あられもなく寂しくて、まず「粗大ゴミ」。次に「産業廃棄物」。その後よく使われたのが「ぬれ落ち葉」。地域につながりを持っている妻と違って何もない夫は、どこに行くにも妻についていく。妻はうっとうしくてたまらない。「婦人公論」の座談会に出ている清水博子さんが言い出した「主人在宅ストレス症候群」も、これからはやりそうです。夫が家にいないことを前提にして個人として輝きのある生を送っていたのに、夫が急に一日中家にいることになったために精神的な病にまでなってしまうということです。

橋爪　戦後社会では、男性は会社で企業人間になりなさい、女性は専業主婦をやりなさいという役割分担が強調された。そうならなかった人も多かったけれど、これがモデルになった。夫と妻は生活時間帯も役割も違って、お互いにごくわずかな接点を持つだけで、別な空間で動いている存在になってしまった。それが夫の定年で四六時中顔を合わせるようになれば、うまくいくわけがない。そこにストレスがたまる構造がある。非常に不幸なことですが、こうなってしまってから解決しようと思ってももう遅いのです。

中西　大橋照枝さんの「世は〝結婚しない化〟に向かっている」（婦人公論）と浅野素女さんの「パリでは単身世帯が半数以上」（同）もそれなりに面白かった。ただ、大橋さんは古いパターンのフェミニズムに傾いていて、議論が新鮮には聞こえない。「週刊朝日」（11／18）の「三30男の5人に1人は生涯結婚できない説」を追う」は、私の周りでも見かける現象にふれていますが、大橋さんには経済的な要因以外でも結婚のかたちが変わることを考える視点がもう少しほしい。浅野さんのものは、日本で紹介される欧米事情によくあるように、一番われわれの常識からかけ離れたところを取り上げている。欧米にも家族や結婚では習俗墨守ともいうべき根本的な保守的部分がある。それにも目を向ける必要があると思います。

橋爪　山田昌弘さんの「結婚難と経済成長」（諸君！）も面白い。アメリカなどと違って、日本ではエネルギーをかけて文化的な価値である家族を作りましょうという男女の合意がないのではないでしょうか。最初は愛とか安らぎの場、次に子育ての場、それから介護といった福祉的な面。時期によって家族に求めるものがするずると変わっていってしまい、結婚する段階で家族という価値観を共有するのだというところがはっきりしていない。それだけに結婚とか家族についての男女のすれちがいが日本の方がおきやすい構造になっているのではないかと思います。山田さんは今の結婚難を、男女とも結婚したいと思って、お互いの要求を持ち出していくと、むしろ結婚できなくなってしまうと分析しています。特にバブルがはじけた後、それがはなはだしくなった。

森　高度成長以後の時代、女性は結婚すれば親との生活より豊かな生活ができた。今は親との生活よりレベルが下がってしまう。少子のため親も嫁と同居したい。これが結婚しにくくなる状況を作っています。

橋爪　山田さんの分析では結局「できる女」と「だめな男」が、とても結婚しにくい。専業主婦になりたい女性と一流サラリーマンみたいな組み合わせは、古いパターンですが、いまでもうまくいくわけです。とりあえず、相手が見つかるという意味で。

中西　そこにある保守性については、私は母親の役割に注目します。男性を作り出す圧倒的な力は母親にある。母親が古い自分たちの時代のエリート志向を持っていて息子をそういうパターンにしてしまう。こういう母親・息子関係が、男性をして一時代前のかたちに固着させているように思います。少子化の時代、具体的には母親と長男ということになります。

後書き

政界では現行憲法でしばらくやって行けるというコンセンサスができつつある時期に、読売新聞社が憲法改正試案を発表しました。評価は「たたき台」として出したことに極端に集中していて、内容については改憲派護憲派中間派のどの立場からも評判が悪い。たたかれっぱなしです。一応、読売新聞社の商売がたき（論敵）である私としても、そのお粗末さに一安心しているところです。

何よりも「憲法とは何か」「二十一世紀の日本」についての哲学が見えない。本座談会でも指摘がありますが、近代憲法の理念を否定する表現が随所にあるのは驚きでした。

想像ですが、起草者の問題よりは一千万部の重圧のせいかもしれません。原理的な護憲派以外の復古派から国際貢献派まで、人権派から反人権派まで、雑多な考えの人すべての支持を得ようとして、理念のごった煮状態にしてしまった。そもそも一千万部パワーを背景にした提言なのだとしたら、何とも皮肉な話です。（雅）

毎日新聞 (夕刊) 1994年(平成6年)12月20日(火曜日)

画一主義と管理と

いじめと学校教育

森　いじめによる中学生の自殺が大きく報道されて、週刊誌がずいぶん取り上げていますが、いじめた子とその親や学校を標的にした非常にセンセーショナルなもので、感情的にあおっている感じが強い。その中では「サンデー毎日」（12／25）の教育評論家の能重真作さんが分析的な視点を出していますが。「現代のいじめは死に直結する」（婦人公論）で土屋守さんが、いじめは昔もあったという議論は誤りで、現在のいじめは受験戦争とか高学歴志向とか偏差値といったものと分かちがたく結び付いているといっているのは大事な指摘だと思います。

橋爪　学校教育を受け学力を付けることはいいことだと、学校も親も本人も思っている。昔は農業や中小企業や商店など学歴と関係ない職業がたくさんあった。読み書きは別にして、受験して上級学校に行かなくてもよかった。しかし戦後、日本人がほとんど俸給生活者になり、所属する企業によって社会的評価を受けるように変わってきて学校第一主義が起こってきた。

親は子供を学校に行かせる以外、子供のプラスになることを何もできない。学校は上級学校を受験するための教育をするから、「出来ない」子供がどうしても生まれる。彼らを学校としては救済できない。職につけばまた状況は変わりますが、学校にいる間はどうしようもない。だから、彼らは学力以外のかたちで自己主張するしかない。その一つが暴力です。自分より弱い人間や、成績がよくて目ざわりな人間に向いたりする。受験体制にいじめはビルトインされている。だから、いじめをしている生徒への対策がまず第一。いまの学校に、そうした対策を取れない構造があるのなら、学校そのものを改造しなくてはならない。

中西　いじめは日本的に特異な現象と考えるべきだ。日本の初等中等教育の極端な画一主義がおそらくいじめの原因で、またこの画一主義と管理強化によって日本の大学教育も本来の機能を果たせなくなっている。「週刊文春」（12／26）で野坂昭如さんも言っていますが、旧日本軍の内務班の構造に非常によく似ている。将校は集団の規律を過度に重んじて、いじめ役を下士官にゆだねているのと同じように、教師が集団の規律と画一性を乱す子供に対して見せる非常に厳しい姿勢を、いじめ役の子供が受け止めた結果いじめが起きている感じがある。

これは教師に責任があるというのではなく、教育のシステム・理念、あるいは日常的な学校運営の問題であって、教育行政に非常に大きな責任があると思います。

そうだとすれば、土屋守さんの議論は精神医学的な対症療法としては重要でしょうが、いじめ論がここで終わってはならないと思います。七〇年代以降、臨教審などいろいろな取り組みがあったのですが、個性という言葉が飛び交っただけで、画一化の点で事態はむしろ悪くなっている。日本の教育がいま直面している問題は戦後日本の「成功」の質を問う根源的なものとさえ言えると思います。

森　確かに対症療法かもしれませんが、いじめの問題があったとき「学校だけは行きなさい」と子供を学校にやるのは逆で、まず学校に行かせないで体を休ませるべきだと、土屋さんが書いています。これは大事なことだと思う。親の方も学校は休んじゃだめだという神話から抜け出せないでいる。子供の意識もそうです。義務教育はそういう制度がないと学校に行けない人が多かった時代のもので、経済的に豊かになった時代、教育のあり方も根本的に考え直すべきだという議論もあります。

中西　社会の側で二世代くらい古い教育観を引きずっている。教育理念の大幅なモデルチェンジが必要です。

橋爪　戦前、尋常小学校は国民学校になって皇民教育を徹底させた。これは成功した教育でしたが、戦後はその反動で、イデオロギーや価値観を持って教育をしてはいけないということになった。これは間違いで、何か価値観がなければ教育はできないはずなんです。価値観を持ってはいけないと信じ込んでいる教師が教育を成り立たせるためにできることは、管理しかない。教育の現場ではさまざまな管理が勝手に行われています。まず教育思想から根本的に立て直すべきです。それからすぐできるのは、小・中学校の自由化です。親に学校を選択する権利を与える。学校でいじめが生じるのは、そこに行くしかなく、そこに行くことが正しいとされているからです。

後書き

「雑誌を読む」は昨年七月に始まって一年半になりました。冷戦が終わった時代にふさわしい、自由で率直でわかりやすい時評ができないだろうか、という狙いで始めた企画です。この欄の知名度も少し出てきたようで、続けることの大切さを実感しております。

この機会に少し楽屋裏を紹介しますと、学芸部の担当はデスク一、部員一で、座談会は毎月中旬に毎日新聞社内の会議室で開いています。一番の苦労はテーマ選びで、毎回、三人の委員の方と電話で相談しながら決めています。今月の「戦後50年」と「いじめ」は比較的あっさり決まりましたが、ぎりぎりまで決まらない月もある。当日にテーマを変更するという綱渡りもありました。座談会終了後の食事の中で次回のアイデアが出ることもあります。（雅）